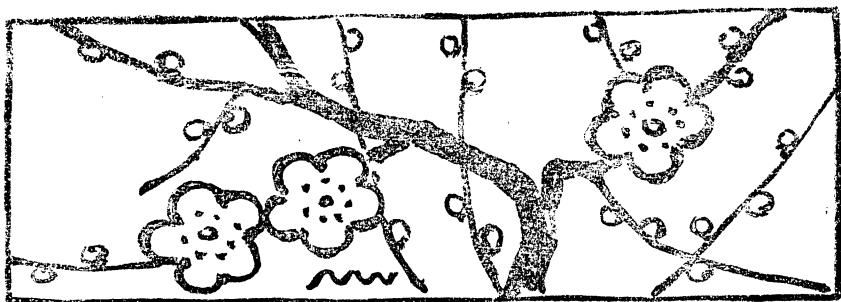




江島生島

小山内薫

(一)

徳川家の治世、延寶七己未年の事であつた。

江戸牛込築土邊に白井兵助といふ小祿の御家人があつた。年はもう六十に近かつたが、生れつき活達無頼な事が好きで、或は遊所に立ち入り、或は博徒と交誼を結び、稍もすれば喧嘩口論に腕立てをして、白刃しろばの中へ飛び入り、わざと我が身に傷を受けて、巷説に名を賣らうとするおろか者であつた。

妻のお久も夫に劣らぬ不行跡な女であつた。かの女は半太夫が節を巧みに語り、楓江が三絃を上手に弾いた。その交友知己には芝居者が多かつた。元より蓮葉育ちの姪婦であつたから、二人の子供はありながらも、夫がよそに寢泊りする留守には、近所の放蕩者や浮氣娘を招き寄せて、夜の更けるまで弾いたり唄つたりの高調子たかてうしを上げた。そして、弾き疲れ唄ひ疲れると、賭博に黄白の一夜勝負を快とした。それにも疲れると、男女入り亂れて、居汚なく雜り寝た。

夫の兵助はこれを知らぬではなかつたが、それに對して一言一句の異議をも狹しむ事は出来なかつた。第一かれは養子の身の上であつた。第二にかれは自身が大の放蕩者であつた。かれが牛込の家に眠るのは、月の内に僅か三晩か四晩であつた。

その頃、八官町の御堀通りに「比丘尼」と稱する隠し賣女が巢を食つてゐた。昔、地獄極樂六道の繪卷を衆人に指し示し、繪解きして佛法を教へ勧めた熊野比丘尼が、いつの間にか自ら墮落して、眉を作り、白齒を磨き、紅をつけ、白粉を粧ひ、忌中の男を見るやうに月代を中がりにして、紗綾縮緬縞八丈などに紅裏をふかせ、黒き帯に裾を引き上げ、黒縮緬の投頭巾に色めかしく頭かしこを包んで、異様に媚めかしい情慾の誘惑者となつたのがそれである。兵助は桔梗長屋にお職を張る比丘尼妙訥、渾名をくされのお安といふのに思ひ思はれて、夜毎に抹香臭い膝を枕にしながら、女が簾に載せて唄ふ丹前柴垣の淫らかな曲節に、家をも妻をも忘れて、心こころを現にするのであつた。

お久が夫の留守に招き寄せる男達の中に、達磨三郎兵衛といふ博奕の友があつた。かれは元大阪の生れで、七八つの頃江戸へ出府したものであつたが、小才の利く生れつきで、隆達節の小唄などを巧みに唄ふところから、その頃は葺屋町の狂言座市村宇左衛門の芝居に使はれるともなく使はれて、或は樂屋を働き、或は看板を叩いて客の呼び込みをしてゐた。かれは巧みに役者の聲色を眞似た。風俗も派手でどこやら役者らしい匂があつた。

お久は一目見たその時から、三郎兵衛の容色に深くも心を動かされたのであつたが、假にも不義などをしかけたら、日頃から氣の荒い喧嘩好きな夫に如何なる酷ひどい目を見せられるか分からないと思つて逸

りに逸る意馬の手綱を、力の限り引き締めてゐた。

併し、兵助の耽溺は日毎に深くなるばかりであつた。かれが草深い山の手の家へ歸るのは十日に一度が、二十日はつかに一度になつた。二十日に一度が、一月に一度になつた。お久は夫の留守を、日毎夜毎の逸樂に忘れながらも、さすがに瞋恚の炎を禁ずる事が出来なかつた。お久は不貞腐れになつた。

『命を取るなら取るが好い。青比丘尼の手管に腰の抜けた男が、この私をどうする事が出来るものか。第一私は家附きの娘だ。離縁をするなら、こつちからして遣る。』

お久はかう思つて、一度に意馬の手綱を切つて放つた。達磨三郎兵衛は或晩突然物狂ほしい人妻の抱擁に會つて驚いたが、元より一人身の身輕者として、決してこの思ひもかけぬ幸福を辭さうとはしなかつた。

二人は忽ち賭博よりも危い歡樂の暗い淵に身を沈めた。二人は子供達の現うつない寢言にも、天井を走る鼠の音にも胸を轟かせながら、夜毎に秘密の世界を樂しむのであつた。今まで博徒と蕩兒の賑かな集會所であつた白井の家も、今は姦夫姦婦が寂しく暗い二人ぎりの中宿となつた。三郎兵衛は夜おそく來ては朝早く歸つて行つた。

或朝、お久が寢亂れた臥所ふしどをまだ片づけ切らないでゐる所へ、何の用があつてか、隣りに住む井上といふ家の老母が突然案内もなしに這入つて來た。老母はそこに列んだ二つの枕を見ると、恐ろしいものでも見たやうに顔を背けた。

お久が月の物を見ぬやうになつたのは、それから間もなくの事であつた。お久はその胤が夫のである

か三郎兵衛のであるかを知るに苦しんだ。併し、一旦井上の老母にも現在秘密の場所を見られた後の事故、とても世間の口に戸は立てられぬと思つた。

或晩、お久は三郎兵衛の膝に凭れて、總ての憂を打ち明けた。そして、最後にかう言つた――

『あたしやいつそこゝを逃げようかと思ふよ。』

三郎兵衛は待ち構へてゐた事がやつと來たといふやうな顔をした――

『やつとさういふ量見になつて呉れたか。俺はもうこなひだ中からそれが言ひたくて言ひたくて堪らないでゐたのだ。有りやうはそつちからしかけた戀とは言ひながら、實を言やあ一目見たその時から、身内の寒くなる程、こつちもお前に打ち込んでゐたのだ。今ぢやあ兵助殿と命の遣り取りをしても、お前を俺のものにしなければやあ置かねえ量見だ。お前がさういふ量見なら、今夜にも一緒に逃げよう。幸、俺の故郷は大阪だから、兎も角も西へ向つて旅立たう。』

『まあ、さうかい。そんなら早くお言ひなら好いに。お前も飛んだ苦勞性だよ。』

『時に、二人のがきはどうするのだ。』

『どうもするものかね。男の子は男に附くのが御常法さ。折角好い心持で寝てゐるものを、無理に起して「子別れ」の愁嘆場を勤めさせるでもなからうぢやないか。』

『飛んだ思ひ遣りのあるお袋様だの。』

『あれ又それをお言ひかい。年寄じみて、あたしやいつそ氣が引けるによ。』

『だが、冗談は冗談だ。愚圖々々してゐて、又井上のおきさ婆にでも見つけれたら一大事だ。直ぐに

仕度にかゝるとしよう。』

かう言ひながら三郎兵衛は直ぐと南部籠に手をかけた。併し、その中にある筈の衣類は大方兵助が八官町へ運んで行つて了つてゐた。三郎兵衛は、それでも無いよりは増しと、籠の底をはたくやうにしてある眼りの物を風呂敷に引き包んだ。お久はお久で用簞笥の引出しから貯への限りを懐へ振ぢ込んだ。

『そんなら、三さん。』

『好いかい、お久。』

二人は雨戸を一枚そつと明けると、足音を忍んで暗い庭へ降りた。

夜が明けて驚いたのは長男の平吉と二男の慶之助である。母の姿が見えない。『いつも来るをぢさん』の影も見えない。母の寢間は盜賊でも這入つた跡のやうに取り散らしてある。まだ頑是ない二人にも、一寸の留守と長く捨てられた寂しさとの區別は自然と感ぜられた。二人は思はず顔を見合せると、同時に烈しく泣き出した。

常ならぬ泣き聲に驚いた隣りの老母は、齒を染めてゐた筆を投げ捨て、駈けつけて來た。老母は座敷の様子を一目見ると、直ぐにゆうべの出來事を悟つた。

氣丈な老母は泣き叫ぶ二人の子を賺しながら、遠い八官町の桔梗長屋を志した。そして兵助に會ふと一部始終の物語をして――

『併し、表立てゝはあなたの御損。この不始末が近所の噂になれば、如何に小祿でも御直參のあなた、家事不取締の罪でどんなお咎めを受けようも知れませぬ。唯この上はけふにも家を移り、歌比丘尼殿と

手を切つて、お子達の成人をお祈りなさるが何よりの罪滅ぼしでござります。」
と言つた。

兵助は話を聞くと齒齧みをして口惜しがつたが、家を外なる自分の不身持にも罪の過半はある事にて、怒るにも怒られず、泣くにも泣かれないで、唯冷汗にびつしより脊を濡らしてゐた。

白井の家が麴町へ移つたのは、それから間もなくの事である。兵助は別人のやうに柔和になつて、妙訥とも手を切り、お表へも忠勤を勵んで、ひたすら二人の子を愛撫した。

姦夫姦婦は無事に平塚あたりまで落ち延びたが、少しは貯へのあると思つてゐた三郎兵衛の懷に實は一文の用意もなかつたので、二人は忽ち路銀に窮して來た。

『三さん、お前少しや持つてゐると思つたに、それぢやあどうもしやうがないの。』

『おりやあ又お前がもうちつとは臍くつてゐると思つてゐたさ。この儘かうしてもゐられまいから、そんなら又江戸へ引つ返すかの。』

『さうさなう。私もこの頃は毎朝の惡阻で、大抵苦しむ事ぢやないから、とてもこの先きの長旅は覺束ないによ。』

『そんなら山雀のあと歸りとしやうかの。』

『もうほとぼりのさめた時分だから、どうか邊鄙へ隠れりやあ、お江戸は廣いから、大抵知れる事ぢやあないよ。』

二人はこんな相談をすると、直ぐその晩、逆に又江戸へ向けて發足した。

お久は草鞋がけで長い道を歩くのが、もう餘程困難になつてゐた。四五日かゝつて、やつと江戸へ這入ると、二人は本所の松倉町にさやかな住居をさめた。

そこで、その明くる年の五月に、お久は安々と女の子を産み落とした。七夜の晩、姦夫の三郎兵衛は臍の緒書に自ら筆をとつて、「白井兵助之長女はつ」と記した。三郎兵衛にもこの子が自分のものか兵助のものかが分からなかつたのである。

二人は手内職などして、この場末のあばら家に辛くも世を忍びながら、内々牛込邊の噂を聞いて廻つたが、左程世間の物議をも醸してゐない様子なので、お初が二歳の春、芝居町に近い葎町へ引き移つて三郎兵衛は又葎屋町の狂言座へ通ふやうになつた。

立つる烟は細くとも、過ぐる命に變りはなくて、お初は早くも六つの春を迎へた。元より器量も美しく、生れつきも惻發なので、夫婦はお初を手の内の珠、挿頭の花ともいつくしんだが、年にはませた生れつきなので、その年の夏から手習物讀みの師匠をとつて、これに通はせ、つひ近所に住む振附の師匠若竹佐平次が元へも弟子入りさせて、末は一かどの舞上手ともなれと祈り、やがては杵屋善太郎が稽古所へも通はせて、三絃の道にも秀でさせようとした。

惻發なお初は一を聞いて十を知つた。かの女は僅か一二年の内に、指折りの踊り手となり、師匠の佐平次に連れられて、富豪の家にも出入りをするやうになつた。お初は三日にあげず貰つた「花」を土産にして、貧苦に悩む両親を喜ばせた。

お初が三郎兵衛の胤でなかつた事は、この一二年の間に明らかになつて來た。お初は五つから六つ、

六つから七つと成人するに連れて、その目つき口元鼻の形に、恐ろしさまで實父兵助に相似の點を現はして來たのである。三郎兵衛は、その兵助に似たお初が、無心で自分に孝行を盡して呉れるのを、どんなにか心苦しく思つたらう。三郎兵衛も今は四十幾つの分別ざかりであつた。

嘗ては放蕩無頼に世をのさばつて歩いた「達磨」も、今は悔悟と懺悔に身を小さくして、狂言の座へも碌々通はずに、暗く寂しい家にお閉ぢ籠つてゐた。樂屋働きに身を粉にしたところで、ささやかな日常しか得られない身が、かうして家にばかり引つ込んでゐるので、生活の困苦は愈々激しかつた。三郎兵衛は夜も眠られぬ程に、苦しみ悶えた。右を見れば兵助に似たお初の寝顔が過去の罪を責める。左を見れば生活に勞れたお久の寝顔が現在の境遇を訴へる。目をつぶれば石町の鐘の音が腸に食ひ入るやうに響いて來る。三郎兵衛は終に氣病みの床に就いた。

貞享四丁卯年の春が來た。門松、注連飾り、凧、遣羽子に賑ふ大江戸八百八町の中心に住みながら「罪の家」なる達磨一家のみは暗く寂しい正月を迎へた。利口なお初は、近所の子達が匹田鹿子に摺箔した流行の衣裳を着飾つて遊ぶのを、心ではどんなにか羨みながらも、飽くまで兩親の氣をかねて、不足らしい顔一つせず、靜かに父が病床の側で、一人雙六などして遊んでゐた。三郎兵衛はそのいぢらしい有様を見るにつけても、鉄焼一つ買つてやる事の出來ぬ今の境涯を、悉く昔の罪の報ひにして、身を切るやうに感ずるのであつた。

踊り初めの日が來た。併し、お初の兩親は、お初に着せてやる物を一枚も持つてゐなかつた。夫婦が顔を見合せて困惑してゐる所へ若竹佐平次の所から迎ひが來た。

『よくはございませんが、御祝儀の着物はこちらで用意致しましたから、どうぞんだん着の儘でお出で下さい。』

といふ口上である。三郎兵衛夫婦は愁眉を開いた。お初もいそ／＼と使の者に連れられて出て行つた。その夕方、目出たく式を勤め終へたお初は、師匠佐平次に着せて貰つた新しい衣裳を、一刻も早く両親に見せたさ、暇乞もそこ／＼に若竹の門を駈け出で、遠くもあらぬ我が家の路次口へ走り入らうとする所へ、不意に小蔭から一人の年を取つた侍が飛び出して来て、慌ただしくお初に聲をかけた。

『これ、これ、嬢や、爺がちとそなたに聞きたい事がある。よい物を取らす程に、つひをこまで一緒に来やれ。』

お初は數へ年で八つの、流石にまだ頑是がなかつた。

『おぢいさん、何處へ行くのだえ。』

『來て呉れるか。それは辱けない。つひそこの横町までぢや。』

お初は惡びれもせず、老武士に手を引かれて、新道の小料理屋まで來た。

『おぢいさん、ここへ上がるのかえ。』

『さうぢや。何ぞいしさうな物でも食べながら話をしよう。』

侍はお初を連れて、奥まつた小座敷へ通ると、一々お初に相談して食べ物を誂へた。誂へた物が來ると、お初は遠慮をせずに直ぐ箸をとつた。

侍はお初が嬉しさうに物を食べる様子を、暫くちつと見詰めてゐたが、やがて涙をはら／＼と零して

獨り言のやうにかう言つた。

「可愛い奴ぢや、そちが母の不所存ばかりに、そちは今のやうな裏屋住居をしてゐなければならぬのぢや。この頃では三郎兵衛も、先非を悔いて、殊の外身を慎んでゐるといふ事ぢや。今更昔の事は言ふまい。爺は唯そちに會ひたかつた。御本丸よりの勤め歸りに、この近邊をうろついたも、けふでもう一月あまりぢや。それといふも、そちが二つの折、ふと往來で見かけた所、何處となく似た父のおもさし、俄に戀しく懷しく、漸う思をけふ達したのぢやが、かく親しく見れば見る程そちは父の子ぢや。可愛い奴ぢや、よう顔見せよ。」

侍はかう言ひ終るかと思ふと、俄に手を延ばしてお初を膝に抱き上げた。そして、又はらくと涙を零した。

お初は何が何やら一向に分からなかつたが、馳走をされた嬉しさに、さして根問ひもせず、侍のするが儘に身を委せてゐた。侍は暫くお初を抱きしめながら泣いてゐたが、やがて手を解いて、お初を疊の上へおろした。

「ええ、われながら不覺であつた。嘸兩親も案じてをらうに。」

侍はかう言ひながら、自分の懷を探つて、かねて用意をして來たらしい一封の手紙と襦袢に包んだ金子とを出した。そしてそれをお初の懷に押し込んだ。

「この二品を落さぬやうに持ち歸つて、父には知らせず、そつと母に手渡ししたがよいぞ。」

「あゝ。そつと母さんに渡しませう。」

「利口者ぢや。早う成人して、母の恥辱を雪がねばならぬぞ。」

『そんなら、おぢいさん。もう歸つても好いのかえ。』

『おう好いとも。父や母も案じてゐように、早う歸りや。』

お初は小さい下駄を踏み鳴らして、いそいそと元來た道へ駆けて行つた。侍はお初の姿の遠く見えなくなるまで、延び上がり延び上がり見送つてゐた。

お初は家へ歸ると、侍に會つた事などは噤にも出さずに、唯師匠佐平次に貰つた春着の美しさを兩親に誇るのであつた。

お初が着て歸つた一枚の小さな春着は、陰鬱な三郎兵衛の一家に始めて正月らしい光を齎らした。お久と三郎兵衛は争ふやうにして代る代るお初を膝に抱き上げた。

お初は久しぶりで父の晴れやかな顔を見たので、何か父に對しては秘密があるらしいかの二品を母親に渡す事が、何となく氣を咎めた。それで、その晩はその儘寢て了つた。

明くる日もお初は母と二人きりになる機を得る事が出来なかつた。三郎兵衛は相變らず、朝早くから夜遅くまで、まんじうともせず苦しげな目を明いてゐるのであつた。

三日目の夕方、お初が常々最良になる或綿問屋の隠居から、年玉代りとして僅かばかりの金が届いた。三郎兵衛は大層喜んで、直ぐお初に餅でも買つてやれと、包みの儘でその金をお久に渡した。

お久はあたりの暗くなるのを待つて、お初の手を引いて町へ出た。お初は好い時が來たと思つた。今夜渡さなければ、もう渡す時があるまい。さう思つて、その途中で、黙つてかの二品を母の手の内に押

しつけた。

『お初、これは何だろ。』

『何だか知らないが、よそのおぢいさんがお前に呉れたのだよ。父さんに見せてはいけないのだと。』

紫の袱紗包は確に金である。堅く封じた一書は確に手紙である。お久は誰からとも知れぬこの意外なおとつれに胸を轟かせながら、直ぐと手昏の封を切つて、歩きながら提灯の火で讀んで見ると驚いた。

忘れもせぬ先夫兵助が筆の跡である。

『先づ以て御健勝奉賀候。左候へば御身永々の流浪、嘸かし御不自由察し入候。これと申すも元我が放埒より起りし事、今に至り悔悟やみ難く候。元より我は他家よりの養子、御身は白井の血筋なれば、一旦は不義の家出を憤り候へ共、今日迷ひの雲晴れては、御身家附の娘を捨て置く事心苦しく、殊には女子を儲けし由傳へ聞き、よそながら逢ひたく思ひ、折を得て面會せしに、何處となく我が面ざしに似たる不憫さ、愈々懷舊の思堪へ難く候。御身これまでの罪を謝しなば、我が若氣の過に免じ、氷解してその罪を問はざるべく、早々御悔悟所上候。就いては金子二十兩、些少ながら何かの用意にもと、密に託し贈り參らせ候。』

讀み終ると、お久は俄にぐら／＼として、危なくそこへ倒れそうにした。けふの今宵までは三郎兵衛の氣病みを、心では窃に嘲つてゐたお久も、流石にこの情の籠つた手昏を見ては、動かずにはゐられなかつたのである。

お久はお初に支へられて、やつと我に歸ると、急にお初の口から細かい事が聞きなくなつて來た。併

し、それを聞いてはお初の爲にならぬと思つた。

そこで、幾度となく口の端まで出て来る間を、無理に胸の底へ押さへつけた。

勿論この事は三郎兵衛にも知られてはならぬと思つた。そこで、歸る道々、お初にも口止めをした。袱紗と手紙は一つにして、懷深く隠して了つた。

この秘密が秘密として過ぎる内に、早くも正月の晦日が來た。男主人の病氣を口實に大晦日の拂ひを延ばされた薪屋酒屋米屋などのたぐひが、今日こそはといふ勢ひで、三郎兵衛の家へ詰めかけて來た。

お久は頭を疊に擦りつけぬばかりにして詫びたが、その詫びはもう聞かれなかつた。待ちにくい暮の勘定を待たされた上に、又正月を逃げられては、いつになつたら埒が明くか分からぬと言ふのである。

もうこの上は家財諸道具を運び出して、無理にも引き負ひに當てなければならぬ。債鬼は聲を一つにしてかう喚くかと思ふと、一人は破れ障子を外しにかかつた。一人は鍋釜を運び出さうとした。一人は病人の夜具を剥がうとした。

お久は餘りの事に、蒲團を剥がうとする酒屋の腕に縫りついた。酒屋は用捨もなくお久を突き倒した途端に、お久は懷深く納つて置いた例の袱紗包を思はず疊の上に取り落した。

づしりと落ちた物の響きに、商人達は思はず顔を見合せた。

『これ御内儀、ないと見せてもあるのは金。ずつしり落とした重みでは、小粒にしても二十四五兩は確かぢや。三人へ皆濟ましても僅かに四兩に足らぬ金ぢや。さあ器用に拂はつしやれ、拂はつしやれ。』掛乞の一人が透かさずかう言つた時、病人の目は既に恐ろしい色をして、袱紗包を睨んでゐた。お久

は實を告げる事も出来なければ、拂ひを拒絶する事も出来なかつた。

お久は冷たい汗を額にかきながら、袱紗包の結び目を解いた。そして、四兩の金を商人達の前に列べると、息を詰めながら言つた。

『このお金はさるお方よりの預り物なれど、今宵につづまる切迫に、暫く借り受けてお拂致します程にどうぞもう手荒な事はせずと置いて下さりませ。』

『金さへ下さりやあ、なんで手荒な事を致しませう。』

商人達はかう言ひながら、てんでに金の分け前を取ると、こそ／＼と逃げるやうに三郎兵衛の家を引き取つた。

病人は掛乞達の足音が路次を出切つて了ふのを聞き澄ますと、いきなりお久の片手を掴んだ。

『これ女房、その金の出どころ言や。俺も昔はならず者で、人の妻まで盗んだ奴だが、この二年越しの煩ひに、今では一念發起して、臨終を待つ三郎兵衛ぢや。如何に貧苦に迫ればとて、人様の物塵一つ盗まうなどと淺ましい心は持たぬぞ。今掛乞にそなたの拂つた金の出どころ、どうも俺は氣にかかる。どこで借りたか。盗んだか。早う言うて安心させぬか。』

お久は返事が出来なかつた。

『返事の出来ぬ所を見れば、さてはそなたは盗んだな。人の物を奪うて來たな。』

『いえ、いえ、そのやうな事ではござりませぬ。』

『それなら、早う出どころを言や。』

『さ、それは。』

『ええ、大それた事してくれた。たとへこの儘親子三人飢死になるとも、人様の物を盗む心はないに女の狭い量見違ひから、あすはお上のお手にあひ、重さお咎めを受けねばならぬか。』

三郎兵衛はくやし泣きに泣きながら、お久の側へ這ひ寄つて、いきなりその襟髪を掴むかと思ふと、足下に踏まへて、散々に打擲した。

『さあ、出どころを言へ。さあ、抜かさぬか。』

三郎兵衛はお久の髪の毛を手を巻きつけ、泣きながら留めに這入るお初を突きつけて、猶も妻を問責するのであつたが、そのはづみに、お久の帶の間から、手舄らしいがはらりと落ちた。

三郎兵衛は手早くそれを取り上げて、行燈の灯に透かして見ると、顔色を變へた。

『むむ、さてはそなたは我が病中に、とうより先夫へ心を通じ、この三郎兵衛を捨ててゐるか。さうとは知らずに、この年月、よう親切にして呉れると思つてゐたが口惜しい。他人の妻を盗んだ罪で、こんな憂目を見るにもせよ。人情知らずの腐つた根性。病みほうけた目を掠め、よくも白井と通じたな。もうこの上は生かして置かれぬ。覺悟しや。』

三郎兵衛は狂氣のやうになり臺所へ這ひづつて行つたが、直ぐと庖丁を手にして取つて返すと、いきなりお久の咽喉を目がけて、それを突き立てようとした。

併し、病人は先程からの烈しい興奮でもう大分勞れてゐた。お久は三郎兵衛に捕へられた左手を逆に拂つて、臺所から表へ逃げようとした。三郎兵衛は逃がすまいとお久の帶にしがみついた。お久は力に

任かせて腰を拂つた。三郎兵衛は思はず手を放したが、はづみで揚板を刎ね返すと、もんどり打つて脾腹を下流しの角へ打ちつけた。

『うむ。』

と、一聲苦しげに叫んだぎり、病人は目を白くして了つた。

家主が來た。兩隣の誰彼も來た。お久とお初は手を盡したが、三郎兵衛はもう蘇生しなかつた。

十年の惡夢は覺めた。お久は三郎兵衛の葬ひもそこ／＼に、お初の手を引いて、白井家へ駆けつけた。

白井の家はその頃飯田町にあつた。お初の二兄慶之助はもう死んでゐなかつた。長兄平吉は平右衛門と稱して、もう前髪立の十六歳になつてゐた。兵助ももう昔の剽悍な面影はなくて、後生願ひの好いお爺さんになつてゐた。

兵助は唯お初が可愛くてならなかつた。それ故、お久の罪もさして咎めず、その儘親子を我が家に留めて置かうとした。併し、さういふ異法は「侍の家」にとつて許される事ではなかつた。

『たとへ小祿でも、幕府の御直參ぢや。一旦不義せしものをめ／＼歸宅させしとあつては、お表への聞こえも如何ぢや。早う他家へ再縁おさせなさん。』

同僚は口を揃へて、兵助にかう忠告をした。兵助も一旦お久の悔悟を見た後は、そのいまだに水々した美しさを、自分のやうな老ひぼれの側で萎縮させるのが氣の毒でならなかつた。そこで、お久にも事情を打ち明け、木梨蓮齋といふ世話好きな町醫を媒にして、同じ御家人の豊島平太夫方へ再縁をさせる事になつた。

お久はお初を連れ子にして。豊島の家へ這入つた。間もなくお久は平八郎といふ男子を擧げた。

お初は僅か一月の間に三人の父親を持つた。さうして、一年立たぬ内に、姓の違つた兄と弟とを持つた。

(二)

段々大さくなるに連れて、自分の家族關係の如何に複雑であるかがお初に分つて來た。お初は折々、ゆうべ見た夢のやうに、幼時の記憶を呼び返すのであつた。葭町の貧しい生活。第一の父の大病。第二の父との邂逅。恐ろしい正月晦日の夜の出來事。お初は段々これらの事の意味が分かつて來るやうに思つた。お初は子供心にも、「夫婦」といふ者を呪はずにはゐられなかつた。お初は「決して自分には嫁には行かない」と思つた。「自分は話に聞いた御殿奉公をして、一生獨り身で暮らさう」と思つた。

お初はさう思つて、御殿女中の資格になりさうな事をのみ學んだ。歌道、書道、諸禮式は勿論、今更で習ひ覺えた遊藝の道をも捨てなかつた。

お初は夜となく晝となく父親をせがんで、どうか諸侯方の奥御殿へお勤めがしたいと言つた。平太夫も妻の連れ子とは言ひながら、同僚白井の胤ではあり、人並優れての惻發者故、どうぞして奥向へ勤めさせたいと思つたが、小身者の悲しさとして、便宜のないのを嘆じてゐると、ふと日頃懇意にする同僚諸星藤兵衛の伯母が紀州家の奥向に勤めてゐるといふ事をちらりと聞いたので、早速諸星の家へ出向いて行つた。

『時に貴殿の伯母御が紀伊様に勤めてござるさうなが、それは誠か。』

平太夫は寒暑一通りの挨拶が済むと、早速かう尋ねた。

『如何にも誠ぢや。松野と言うて鶴姫様附の老女株ぢや。』

『それなら、ちと折り入つて願ひがある。』

『何ぢや。』

『手前、當年十四歳になる娘を一人持つてをる。名を初と云ふが、中々の俐口者ぢや。これを伯母御の部屋子に使うて貰ひたい。』

『造作もない事ぢや。頼んで見よう。』

話はこんな事で、意外に早く道が開けた。二三日すると諸屋から、早速お召抱へになるといふ返事が来た。

お初は名をみきと改めて、土橋御門外なる紀伊中納言綱教の御簾中鶴姫君附の老女松野の許へ部屋子として住み込む事になつた。元祿六年の事である。

おみきは元より才智に優れてゐた。かの女は立居振舞、一言二言の物の言ひやうにも、決して卑しい素性を裏切るやうな事はなかつた。かの女は直ぐと主人松野の氣性を吞み込んで、何事にもその氣に入るやうに氣に入るやうにと勤めた。元より、絲竹の道には優れてゐたので、折々は松野の取持で、大守が内君の御前へ内々で召し出だされ、はやり的小唄、舞の一手に御徒然の興を添へる事もあつた。

おみきは自然出世が早かつた。間もなくお末といふ役に召し出されて、それから廿二年まで無事に勤めたが、その年の春主人と頼む松野にも死なれ、續いて鶴姫君にも御逝去あられたので、終に永のお

暇を賜はる事になつた。

おみきが實家の豊島へ歸ると間もなく、母のお久と元の父兵助が、相續いて世を去つた。今は思ひ置く所もなしと、諸方からの縁談を斷つて、明くる年の三月、再び櫻田甲府様の奥向へ勤める事になつた。元祿十五年の事である。

當時は五代將軍綱吉の治世であつたが、綱吉に正統の男子がない所から、世繼についての様々な爭論があつた。お傳の方は愛女の婿紀伊中納言綱教を世に立てようとする。柳澤吉保は自分の妻にお手が附いて出来たと稱する松平吉里を未來の大將軍にしようとする。水戸の藤井紋太夫は私慾から義公の養子綱條を西丸へ直さうとする。議論百出の中で、飽くまで公平無私な正義の論を吐いたのは水戸光圀であつた。

『將軍の兄君甲府綱重殿御在世ならば、當然五代の將軍と仰がるべきであつた。然るに、兄君御逝去遊ばされ、閣下大統を繼がせられたる上は、綱重殿の御子綱豊殿を御養君として西丸へ直し給ふが當然の御事である。』と言ふのである。

綱吉は兄の綱重と仲が好くなかつたから、その子の綱豊をも可愛いとは思はなかつた。併し、東照宮の御孫、一門の長者として天下に人望ある義公の説を無下に斥ける事は出来なかつた。その内に、紋太夫は陰謀を知られて、水戸義公に斬られ、紀伊中納言は病死して了つた。そこで、綱吉は好まぬながら甲府宰相綱豊を世子に立てて、寶永元年十二月に、これを西丸へ迎へる事になつた。即ちおみきの御主人櫻田の殿様が將軍の御世繼となつたわけである。

甲府綱豊は好色であつた。近衛家から興入された御臺所熙子の方の外に、右近の局、新典侍の局、齋宮の局、左京の方などといふお妾がゐた。おみきは左京の方に仕へて、名を初音と賜はつてゐたのである。寶永六年の正月に五代將軍綱吉が薨去されると、甲府綱豊は六代の將軍となられた。名を家宣と改めて、直ちに本丸へ移り住はれた。

同時に左京の方も山里の御殿へ住む事になつた。従つて、おみきの初音もそこへお供をした。

左京の方は西丸の大奥にゐる頃から、家宣の胤を宿してゐたのであるが、その年七月三日に、その山里の御殿で鍋松君を生んだ。家宣はそれまでも、御臺所熙子の方には女子を儲け、右近の局には家千代君を儲け、新典侍の局には大五郎君虎吉君を儲けたのであつたが、いづれも早世であつたところへ、將軍宣下その年に、計らずもこの世子を得たので、上下の喜びは非常なものであつた。左京の方は直ぐに中老の名を捨てて、「お部屋様」と仰がれ、身分の取扱ひが「お上通り」となつた。勿論、將軍の寵愛は總ての侍妾を壓して、左京の方一人に集まつた。

おみきの初音は主人の出世に連れて出世をした。かの女は幕府の親藩紀州家に長く勤めた経験もあるし、本丸へ這入つてからも決して奉公にそつのあるやうな事はなかつた。素性が卑しくて聰明に育つた左京の方とも意氣相投じた。殊に鍋松君御分嬖の際は表使として殊功を立てたので、左京の方が本丸へ移られると間もなく、大奥總女中の筆頭たる「お年寄」役に取り立てられ、名も江島と改める事になつた。

「お年寄」は男で言へば老中にも比すべき大奥第一の重役である。かの女は日々詰所に端座して、煙草

盆を前に置き、御用の外には少しも身を動かす事がない。かの女は諸向きより申し来る大奥一切の政務を一々裁決して命令する。御配膳を司る。到來のお文を披露する。紅葉山、芝、上野などへの御代參を勤める。御臺所に代つて、命令、新任、賞罰などの申し渡しをする。それ故、威權他に秀でて高く、一言口を離るれば、よく詞返しをする者がない。幕府親藩の御簾中などが參内された場合でも、決して頭を疊に附ける事がない。

その住居と言へば、長局の一部屋で、間口三間奥行七間の二階作りである。部屋は六間に仕切られてゐる。南の縁に接した所が幅一間の入側になつてゐて、天井に金網を張つた引窓がある。女中はここで化粧をしたり、鐵漿をつけたりする。その次は八疊で、南北に襖が締めてある。西に床がある。間口一間奥行三尺の板疊で、黒塗の框がある。床柱は檜の糸柱で、違ひ棚は櫨の溜塗である。それから東に間口一間奥行三尺の佛間がある。座敷から三尺上がった所に中敷居があつて、これに黒塗本骨の障子が箝めてある。中には一段の壇が設けてあつて、女中親族の位牌並びに將軍御先祖代々の過去帳が備へてある。四方の貼付から天井まで金泥で、蓮華の模様が莊嚴である。佛壇の外には大抵机などを置いて、書齋にあてたり、他の女中との應接所にしたりする。次は六疊で、南北が襖、西が押入になつてゐる。こは女中の飲食座臥の間で、多く衣裳などが納つてある。その次に二疊敷の入側があつて、又その隣りに八疊の部屋がある。こは部屋子のゐる所で、左右は貼付、南は襖、北は障子である。その部屋の西に梯子があつて、ここから二階へ上がるやうになつてゐる。二階の間取りも略下と同じで、北に窓がある。この外、部屋子の間の北に更に一間があつて、北の縁に接してゐる。これが臺所及び玄關である。

長局一體の襖は地白に銀で花唐草が押してある。天井小壁の貼付は地白に銀泥で鐵線唐草の模様が現してある。部屋の内には三十坪程の庭もあつて、泉水、築山、石燈籠などが風情を盡してゐる。

當年の最初は齡三十にして、この要職に就き、この美屋に住む事になつたのである。かの女はかくて左京の方附の家老小林奎之助、笹本靱負と同格の扱ひを受け、祿高六百石を賜はり、大奥の總女中二百八十九人の總支配者となつたのである。

江島の立身に連れて、かの女の近親知己が取り立てられた。實兄白井平右衛門は今まで僅に三十俵二人扶持の同心席であつたのが、お目見え席に進んで、三百俵を賜はり、大阪勤めを承る事になつた。義弟豊島平八郎も新御番に取り立てられた。嘗て江島を紀州家へ周旋した諸星藤兵衛は關東の代官に任ぜられた。その外、知人平田伊右衛門は御留守居番に拔んでられ、西與一右衛門は御勘定方を命ぜられた。實母お久が豊島家へ再縁する時媒をした木梨蓮齋の甥なる表醫師奥山交竹院も、鍋松君に御異例のあつた時、江島の詞一つで奥醫師に取り立てられ、二百俵の御加増があつて、五百石十人扶持を賜はる事になつた。

正徳二年十月十四日に將軍家宣が五十七歳で死ぬと、鍋松君が五歳で征夷大將軍左近衛大將となつた。七代家繼これである。御臺所熙子の方は髪を切つて、天英院と稱した。左京の方も、同じく薙髪して、月光院と稱へた。右近の局は本丸を出て、虎の門の屋敷に住んだ。新典侍の局は故郷の京都へ歸つた。翌年將軍宣下の時、月光院は從三位に叙せられ、吹上御殿に移り住んだ。

月光院が將軍の「御母公」として、權勢天下に比ひなき者となると同時に、これに附き添ふ年寄江島

も、愈々大奥に上なき者となつた。

(三)

江島は十四の年にお目見え以下の部屋方として、紀州邸へ這入つてから、三十歳の今日、大奥總支配のお年寄に進むまで、一刻として心に油斷をした事はなかつた。かの女は父母の轍を踏むまいとしたよりは、父母の社會的恥辱を雪がうとしたのである。かの女は先づ何よりも出來得る限り自分の身分を高いものにしようとした。利口なかの女は策略に依つて得る位置の極めて危い事を知つてゐた。かの女は蔭日向なく身心を努めて、一步一步に基礎の強固な階梯を登らうとした。その結果は「無比の忠勤」となつて現れた。かの女は如何なる人から見ても、極めて正しい進み方をしたのである。

一方に於いてかの女は、自分の卑しい素性を決して人に知られまいとした。かの女は飽くまで言語座臥を慎んで、苟も人に批を打たれまいとした。幼時命をかけて習ひ覺えた遊藝で、たま／＼御前の興を添へるやうな場合があつても、かの女は飽くまでそれを餘技に過ぎぬとやうに見せかけた。かの女は意志の力で、「過去」と縁を絶たうとしたのである。かの女は「自然兒」としての自分に、手械足械てかせあしかせをかけて了つたのである。かの女はあらゆる人慾に對して耳目に膠した。かの女は渾身の慾望を對人的の「立身」にのみ集めた。

併し、かの女は今努力に依つて得られる婦女子最高の地位を得た。御本丸大奥の總女中、お半下、お犬、部屋子に至るまでを併せて千餘人の者が、かの女の口の動かし方一つで、生殺いづれにもなるやうになつた。お表の老中若年寄と雖、かの女に對しては一目を置いた。將軍の生母月光院尼公でさへ、私

にはかの女と膝を交へて物語つた。

かの女の上には、もう登るべき峯がなかつた。かの女は今、目に遮るものもない、晴れ晴れとした山の頂上に立つた。そこで、かの女はほつと息をついた。十六七年張り詰めてゐた心に針程の隙けきを生じた。その小さな隙に乗じて、俄に頭を擡げて來たのは、長くかの女の體内に息を窒してゐた姦婦かんぶ久の血である、無頼漢兵助の肉である、蕩兒達磨三郎兵衛の靈魂である。

五歳の幼兒を將軍として頂く七代の内閣は、男子に權威のある者が少なかつた。大老井伊掃部頭直詰は平凡人で、勢力がなかつた。老中も五人はゐたが、土屋相模守政直は七十餘の老人で、身心悉く衰へてゐた。大久保加賀守忠増、井上河内守正岑、阿部豊後守正喬は、所謂「伴食宰相」で、何事をも獨自に裁決する事は出来なかつた。ひとり秋元但馬守喬朝だけは、多少の才幹を備へてゐたが、これとても一身に責を負ふ勇氣のある人ではなかつた。それ故、天下の大政は將軍のお守役たり後見たる間部越前守詮房一人の手で裁決せられた。詮房は櫻田以來六代家宣に仕へて、幕府内外の萬機を取り裁き、百石の小身から五萬石の大名まで經登つて來た才人である。家宣の寵儒新井君美白石の如きも、かれの庇護を蒙る事が多かつた。

詮房は能役者の子であつた。かれは容色の美を以て、先づ家宣に愛されたのである。かれは嘗て妻を迎へなかつた。又、妾をも蓄へなかつた。將軍家宣の侍妾は悉く又かれにも許されたのであつた。

詮房と月光院とは櫻田御殿以來の馴染であつた。家繼が將軍となるに及んで、かれは侍従として、これは母公として、日夜幼ない將軍の側を離れなかつたのは、この二人のみであつた。月光院は髪をこそ

切つてゐたが、まだ二十五歳の若後家であつた。かの女の艶めかしさは、市井の「物づくし」にも役者と對にせられて、「後家方のよい物——山下金作と月光院様」と唄はれた程であつた。詮房も年こそ五十を越してゐたが、天成の麗質いまだ容易に衰へなかつた。二人は近づきまいとしても、近づかずにはゐられなかつた。

或冬の夕であつた。詮房は上下を脱いで、頭巾を冠つて、月光院と二人で炬燵へあたりながら酒を飲んでゐた。そこへ可愛い將軍が不遠慮に遣入つて來た。そして、「越前は上様のやうぢや」と言つた。「上様」とは先將軍家宣の事である。

前將軍の時代に、大奥で度々行はれた芝居狂言の催しも、七代になつてから愈々盛であつた。「お狂言師」と稱へて、役者も囃し方も振付も總て女子から成り立つ百七八十人程の一座が、悉く駕籠の儘、庭先から大奥へ入り込むのである。一座中には常に幾人かの女装した男役者が交つてゐた。かれらは馴染の老女や中老の部屋に、五日も六日も泊つてゐた。どこの長局へいつ行つても、役者狂言芝居の噂の聞かれぬ時はなかつた。勿論、近臣侍醫などと女中達の仲もみだらであつた。

大奥御用達の商人達は、競つて女中達の歡心を得ようとして、或は宿下がりの折を伺つて芝居見物を馳走し、或は宿元へ酒肴菓子的美々しさを盡して進め、或は御機嫌伺ひと稱して時好の反物を贈り、甚しきは御代參の歸途を要して、料理茶屋へかれらを招じた。かういふ賄賂の結果は大奥に幾多の新しい御用達を生じた。終には醬油御用達、酢御用達、桶御用達、箱御用達といふやうなものさへ出来るやうになつた。六代の内閣は一時これを嚴禁したのであつたが、女中達が直接將軍に向つてする壁訴訟は、

さういふ正しい御沙汰をも忽ち反古にして了ふのであつた。

江島の耳目は急にかういふ世界に向つて開いた。かの女は今まで夢にも知らなかつた感動を以て、城内幾多の情事に耳を傾けた。かの女は今まで嘗て覺えなかつた欲望を以て、御用達の進物に目を輝かした。かの女は夢のやうに幼時の生活を思ひ出した。最初の父が日夜出入した戯場歌舞の歡樂世界は、まざ／＼とかの女の腦裡に蘇返つて來た。

江島の血は始めて自由に流れた。江島の靈魂は始めて自由に躍つた。

(四)

その頃、淺草の諏訪町に津賀屋善六といふ諸家御用達の商人があつた。かれは武家諸侯に手廣く出入して、何不足なく富有に暮らしてゐたが、唯本丸へだけは出入りの便がなくて、始終それを遺憾に思つてゐた。

津賀屋の同町内に、出羽屋源七といふ藏所の米宿が住んでゐた。かれは元懷月堂安支と號して、大和繪を業としてゐた者であるが、書畫骨董の周旋をも副業としてゐたところから、絶えず津賀屋へ出入をする内に、主人の庇護を得て、終に今日の地位を得る事が出来たのである。かれは屋敷方に極めて顔の廣い男であつた。

或日、津賀屋と出羽屋の間に、かういふ會話が交された。

『時に出羽屋、俺は御本丸の炭薪の御用を達したいと思つてゐるがどうだらう。御城内八ヶ所の御用を一手に引き受ければ、内端につもつて一年四五萬兩の儲けにはなると思ふが、表向き御用人へ願ひ出た

ものだらうか。それとも町奉行へ願書を出したものだらうか。』

『成程、御本丸へお出入りをなさらうといふのは好いお考へです。併し、當今は御政道が厳しうございますから、表向き願つたところで、中々お聞き入れはございますまい。わたくしの考へでは、一應町奉行へ願書を出して置いた上で、裏道から這入り込んで行くのですな。』

『裏道といふと。』

『月光院様附のお年寄へ取り入つて、それから詞を添へて貰ふのです。』

『月光院様と言へば、當將軍様のお腹様ではないか。』

『それだから都合が好いのです。當時の御本丸は從三位様次第でどうにでもなるのですから。』

『だが、さういふ貴いお方のお附では中々手蔓が得られまい。』

『ところが、大層都合の好い事があるのでございます。わたくしの以前御最負を受けてゐましたお奥のお醫者様に奥山交竹院といふ方がございます。』

『俺もお名前は聞いてゐる。飯田町にゐらつしやる方だらう。』

『左様でございます。あのお方と從三位様附のお年寄とは、なんでも御親類だとかいふ事で、大層お取り用ひになつてゐるといふ話ですから、先づあの方から手に入れてかかるのですな。』

『進物でもするのか。』

『それに限ります。』

『併し、受けて下さらうか。』

『以前骨董のお取引をしたので覚えがありますが、中々慾の張つた方ですから、お受けになる段ぢやございませぬ。』

『成程、それなら裏道があきさうだの。』

この話があつた明くる日、津賀屋は出羽屋を案内にして、早速奥山交竹院を訪ねた。

津賀屋は初お目見えの手土産として、交竹院へ唐織の羽織二卷に裏地を添へて贈り、その妻へ紅縮緬金糸小縫の小袖四つに裏綿を添へて贈り、その子へ進物代として金百兩を贈つた。

『御丁寧な土産で恐れ入つたが、何ぞお頼みの筋でもあつて參られたかな。』

交竹院は狡猾らしい大きな目を光らして、直ぐとかう言つた。その物越態度がかういふ事にはもう馴れ切つてゐるといふ風である。津賀屋は先づ安心した。

『實は外でもございませぬが、御母公様お年寄へあなたから願つて頂いて御城内八ヶ所の炭薪の御用をわたくしが足したいと存じますのでございますが。』

『それはわけもない事だ。江島様さへ御承知になれば、直ぐにも出来る事だ。一つ愚老からお話をして見る事にしよう。併し、お城は中々厳しいから、表向き進物を持つて參るわけにも行かぬが、それには丁度よい事がある。近頃お年寄は大層芝居を見たがつてをられるから、芝居見物へお誘ひ申すのだ。』

『併し、わたくし風情がお誘ひ申し上げたところで、お出ではなりますまい。』

『それは勿論愚老の催しといふ事にするのだ。』

『成程、さう願へれば、大丈夫でござりませう。』

『芝居一切のお取持は竹之丞座の狂言作者中村清五郎に頼むがよい。あの男は先將軍様時分から、お狂言のお催しなどで、度々お城へもお出入りをしてゐるから、お女中方の事にはよく馴れてをる。あれの女房のお梅といふものも、以前紀伊様でお奥勤めをしてゐた時分から江島様とお馴染であるし、亭主と一緒にお城へも度々伺つてゐるから、これにもよく相談するがよい。』

『それは好い事を承りました。すべて仰せの通りに致しませう。』

『それから、お年寄の御實兄で白井平右衛門といふ方が、つひこの近所にをられるから、そこへも一度顔を出して置くがよい。この方はつひこなひだまで大阪表へ出向いてをられたのだが、かの地の商人達との間にちと宜しからぬ事があつて、江戸へ歸られたのが、いづれにもせよ江島様には御實家の事であるから、御機嫌を取り結んで置くに如くはない。それに、さういふお方の事であるから、黄白の利き目は確にある。それから、お年寄の弟君に新御番の豊島平八郎といふ方がをられる。これも是非味方につけて置かなければならぬ一人だ。それから、その豊島様に地所を貸してをられる御勘定の西與一右衛門様、櫻田御殿以來のお氣に入りである御書院番の平田伊右衛門様、小譜請奉行の金井六右衛門様、越後御代官の金丸四郎兵衛様、これらは何れもお年寄の恩顧を受けてゐる者だから、それ／＼附け届けをするがよい。それからお城の女中方では、新御中老の宮路様、御同役の木曾路様、表御使番の梅山様などがお氣に入りであるから、これらにもそれ／＼お取りなしを頼まなければならぬが、この方は芝居見物の折にお誘ひ申し上げる事にするから、それでよい。』

『どうも色々御親切にお教へ下さいまして有難うございます。早速出羽屋とも相談を致しまして、それ

く、その手配に致しませうから、お芝居の方の事は何分宜しく願ひ申し上げます。』

『それは承知致した。併し津賀屋、中々の物入りだの。』

『いえ、それはもう、この儀さへ叶ひますれば、暖簾の譽でございますから、如何程かかりましても厭ひは致しません。』

津賀屋と出羽屋は、交竹院の食欲らしい笑顔に見送られて、いそぐと飯田町の奥山邸を辭した。

(五)

或日、交竹院は江島にこの事を話した。

『日夜のお勤めで、さぞ御心勞にごさりませう。たまにはお氣晴らしも御肝心かと存じます。ついでに近日狂言の座へお招きが致したいと存じますが、如何でございます。』

交竹院は元より江島の素性を知つてゐる。江島も交竹院が自分の素性を知つてゐる事は知つて居る。併し、二人は飽くまで互に「不知」を装つてゐなければならなかつた。

『宜しい。芝居見物承知致しました。』

『芝居はどこがお望みでございます。』

『山村の芝居が大層評判のやうだから、あそこへ行つて見たいと思ひます。』

『木挽町でございます。宜しうございます。してお出ましはいつになります。』

『この廿五日に亡父の年回でお宿下りを願ふから、その折にして貰ひませう。』

『畏りました。つきましては、宮路様木曾路様梅山様などをもお召し連れが願ひたいのでございますが

この儀は如何なものでございませう。』

『少しも差支はありません。それ〴〵内々に申し聞かす事にしませう。』

『恐れ入りました。その外どなたなりともお相手になりさうなお方をお供にお加へ下さいまし。』

『宜しい。承知しました。』

芝居見物はかういふ冷たい會話の間に、忽ち約束されて了つたのである。交竹院は直ぐとその旨を津賀屋へ申し傳へた。

交竹院が宮路梅山などを誘つたのは、決してかれらが唯江島の氣に入りであつたが爲のみではなかつた。交竹院は日夜大奥に出入して、かれらの淫がはしい素性をよく知つてゐたので、かかる場合の一味として、かれらに如くものはないと思つたのである。

宮路の父は糺町一丁目の呉服商松屋金右衛門といふものであつた。宮路は幼名をさだと呼んだ。生來惻愼の質で、殊に容色が美しかつた。十六七の頃、堺町の芝居で、飯田町の同業者近江屋五郎右衛門といふ者に見染められて、そこへ嫁に行つた。然るに、おさだは縁づくと直ぐ懐胎して、忽ち臨月近い體になつた。夫の五郎右衛門は大に驚いて、早速醫者にかけたところが、果して妊娠といふ見立てであつた。五郎右衛門はひどく腹を立てた。そんな不埒な娘とは知らずに縁組したのがくやしいと言つて、直ぐにおさだを實父の許へ返した。そして、あとから直ぐ離縁狀を送つた。おさだの父は娘の不埒に甚しく面皮をかいて、一時は勘當をするとまで怒つたが、涙を零しての母のとりなしで、おさだは一先づ赤坂の叔父の家へ預けられる事となつた。おさだはそこで産をしたが、生れた子は果して近江屋へ縁づか

ぬ前に關係のあつた者の胤であつた。それでも、おさだの親達はもう一度娘を近江屋へ再縁させたいと思つて媒人の口から頻に詫びを入れさせたが、近江屋では終にそれを聞き入れなかつた。そこで、それでは御殿奉公でもさせて、惡名を雪ぐより外はないといふので、十八の冬月光院がまだお小姓を勤めてをられた頃、お髪結といふ輕い役目で御本丸大奥へ住み込ませる事にした。宮路は江島と同じやうに、月光院の立身に連れて、自分も出世をして來たのであつた。併し、かの女が新中老の重役に出世をした時分には、もう苦勞をかけた兩親もこの世を去つてゐて、生家もいつか退轉してゐた。

宮路が兄と稱する者に、本石町一丁目に住む町醫師山田宗見といふものがあつた。嘗ては松平右衛門督から出入扶持をも賜はつて、可なりな暮らしをしてゐる者であつた。宮路は宿下りの時といふと、きつとこの家に寐泊りしたものであるが、いつの頃よりかこの宗見と道ならぬ枕を交すやうになつた。その後は毎年春の宿下りは勿論、お使の途中などでも度々逢引が重なつたので、宗見の妻も今は黙してゐられず、「假にもさやうだいの縁を結んだ中で、犬畜生にも等しい振舞」と熱涙をこめて夫を諫めたが、宗見は少しもそれに耳を貸さず、却つて妻を離縁して了つた。さうして、愈々宮路と密會を重ねた。

梅山の父も美濃屋新藏といふ町人であつた。十七歳の時、御本丸お廣敷のお年寄で清田といふのが茶の間に使ふ女を抱へたいと言つてをられると聞いて、或人の世話でお目見えに上がつたところが、大層氣に入られて、直ぐ茶の間へ雇はれる事になつた。併し、所謂「又者」なので、どうぞして御直參の御奉公が勤めたいと思つた。そこで、梅山は清田の部屋を出で、その時分大年寄だつた左京の方の許へお髪結として召し抱へられる事になつた。梅山も江島宮路などと等しく左京の方の立身に連れて、出世をし

て來た一人であつたのである。かの女は宮路より四つ程年上であつたので、宮路の秘事については何かと世話を焼いた。

間もなく芝居見物の當日が來た。正徳三年四月二十五日である。津賀屋善六と出羽屋源七とは羽織袴で朝暗い内から、木挽町六町目の山村長太夫座へ詰めかけ、狂言作者中村清五郎を宰領として、江島招待の準備に心を盡した。

棧敷は八間借り切つて、上の四間には御簾をあろして、後へ幕を打ち廻し、下の四間には幕のみを打つて、金屏風を引き廻した。仕出し一切は前々日あたりから藤屋又五郎といふ茶屋に命じて置いた。菓子には飯田町の御用達虎屋から取り寄せた。

そこへ當日の主人役たる奥山交竹院が水戸家へ仕へてゐる弟の喜内を連れて來た。交竹院から招きを受けた江島の兄白井平右衛門、弟豊島平八郎もやがて來た。御書院番の平田、小普請奉行の金井、御勘定の西、御代官の金丸なども追々と馳せ參じた。いづれも前以て津賀屋から莫大な附け届けがしてあるので、暫くは善六と源七が阿諛の拶挨に取り卷かれた。

やがて、女中達が忍びく／＼に鉦打駕籠を釣らせて來た。かれらは一人一人用をかこつけて、離れ／＼に本丸を出て來たのである。江島の顔が見えると、津賀屋と源七は直ぐ蔭へ隠れた。そして、蔭で江島の取持に心を碎いた。

その時の狂言名題は『花館泰平愛護』で、その二番目が「助六」の初演であつた。役々は大道寺田畑之介後に花川戸助六が幼名を九藏といった二代目市川團十郎、傾城揚巻が玉澤林彌、髯の意休が山中平

九郎、助六母が袖岡政之助、傾城喜瀬川が藤村半太夫、白酒賣新兵衛實は荒木左衛門が前名を野田藏之丞といつた生島新五郎であつた。

團十郎と新五郎とは山村座の二明星であると共に、劇壇の二明星であつた。團十郎はまだ二十六歳の壯年であつたが、技藝にも體質にも父才牛の血を傳へて、武道荒事に妙を得てゐたと同時に、父のよくしなかつた和事にも長じて、剛柔二つながら兼ね備へてゐた。新五郎は團十郎より十七も年上であつたが、中村七三郎の藝風を傳へたやつし上手の器量よしで、好色第一の丹前役者であつた。かれは濡れになると、屢々「さしあひ過ぎた臺詞」を言つた。かれはいつも色めかしく肩をゆすり、物言ふ度に唇を嘗めた。

助六の狂言が始まつた。花やかな廊の景色。傾城の道中。江戸節の淨瑠璃で美々しい羽織衣裳の客意休が、白毛の髻に香をたきながら、供大勢連れての出。やがて揚卷の生酔の道中。舞臺一面花やかなところへ、黒紬に三升と牡丹のふせ繻をした着附で、巾廣の帯に長い刀を一本さし、紺子色の鉢巻をして、紺足袋をはいた助六の出。傘さしての風情。爽かな惡たいの辨舌。かんでら門兵衛の可笑しみ。白酒賣の和事。母が異見の紙子に友切丸詮義の爲と實情を明かす助六。揚卷助六があつさりとした濡れ事。意休の殺しから屋根の上の仕合ひまで、一同歡を盡して見物した。

併し、江島は楽しまなかつた。かの女は御簾内に膝も崩さず座つてゐて、遠くからおぼろけに役者の顔を見たり聲を聞いたりしたところで、それが何で面白からうと思つた。かの女は二十年ぶりで芝居櫓の下を潜ると、急に子供の時が戀しくなつたのである。子供の時は千秋樂の日にさつと母に連れられて

葺屋町の芝居へ見物に行つた。併し、決して客として行つたのではない。内裏の者として、何處でも好きな所で見物する事が出来た。勿論、樂屋へも出入りした。振袖を着た眉のない「子供」の役者達とも仲よく遊んだ。「達磨の娘か。鶯が鷹だの。大きなつて轉ばぬやうにしろよ」などとざれ口を利きながら、立者の役者が菓子を呉れた事もあつた。併し、さういふ自由は今何處にもない。かの女は大奥の詰所から狂言座の棧敷へ唯座を移したに過ぎなかつた。かの女はお年寄の威嚴を失つてはならなかつた。かの女は身動き一つ出来なかつた、ざれ口一つ利けなかつた。かの女は、助六の狂言の途中まで來ると、口に手を當てて、二つ三つ續け様に欠をした。

幫間半分の狂言作者清五郎は、敏くもそれを見て取ると、直ぐ出羽屋の側へ行つて、かう言つた。

『お客様の内には御退屈の方があるやうだ。まだお肴が足りないぞ。』

源七には清五郎の言ふ事が分からなかつた。

『これ程心を盡しておもてなしをしてゐるに、まだ何ぞ足りぬものがあるかの。』

清五郎は聲を上げて笑つた。

『召し上がるお肴に不足はない。お酒のお相手の事だ。』

源七は思はず横手を打つたが、直ぐに交竹院を呼んで、かう囁いた。

『御遠慮なくば、役者どもを棧敷へ呼んで、お酒のお相手を致させませうか。』

『それはよい所に氣が附いた。一應伺つて見よう。』

交竹院は直ぐと江島の背後へ來て、その趣を傳へた。江島はこれを聞くとやつと胸の開くやうな氣が

した。

『宜しからう。それは一しほの樂しみぢや。』

江島はいつものやうに、冷たい儀式的な詞で返事をしたが、その微笑んだ目の色には隠し切れぬ嬉しさがあつた。

清五郎は交竹院の返事を聞くと、急いで樂屋へ駆けて行つて、「子供」の役者を残らず連れて來た。清五郎は直ぐと役者どもを女中達の棧敷へ割り込ませて、酒の相手をさせた。そして、盃一つ毎に祝儀を與へた。三十五六人の「子供」は代る／＼女中達の間へ膝を交へて、座を取り持つた。

併し、江島はやはり樂しまなかつた。こんなじや／＼した者どもを相手にして、何が面白からうと思つた。「はじめて芝居へ足を踏み入れた者とも思つてゐるのか。清五郎も芝居者に似合はぬ鈍な男だ」かの女はさう思つて、蔑むやうに清五郎の顔を見た。

今度は金井六左衛門が江島の不快な顔色を見て取つた。

『清五郎、子供ばかりでは興がない。立役をも呼んだらどうぢや。』

金井はかう言ひながら江島の顔色を窺つた。「子供」達の宰領にうつかりしてゐた清五郎も、これを見ると直ぐに氣がついた。

清五郎は又急いで樂屋へ行つたが、やがて市川團十郎、生島新五郎、座主の山村長太夫などを連れて來た。もう助六の狂言が濟んで餘程幕合の立つた時であつた。

三人はいづれも黒の紋附に袴を着けて來た。團十郎の紋は牡丹丸、新五郎の紋は須濱、長太夫の紋は

丸に寶の一字である。かれらはまた客を誰とも知らなかつたが、唯お城の重い女中とのみ聞いて、威儀を正して來たのである。

『當座座元山村長太夫めにございます。』

『生島新五郎めにございます。』

『市川團十郎めにございます。』

三人が同じやうに、自分の名を自分で言ふと、江島は始めてにつこり笑つた。

『助六の芝居面白う見ましたぞ。』

三人は恐懼して頭を床に摺りつけた。

『そのやうにされては氣詰まりで興がない。盃を取らす程にこれへ來や。』

三人は愈々恐れ入つた。

江島は一人一人に盃をさしながら、一人一人の姿形をつくつく^{すがたかたち}と見た。長太夫はまだ二十六七の若者で、その若衆めいた鬘の結びやうにも、その色子めいた襟の着こなしにも、何處か芝居者めいた艶めかしさがあつたが、その迫つた眉宇の間には、流石に劇場の經營者らしい打算的な野心のひらめきが見られた。新五郎はやせ肉の艶めいた男で、年よりは十も若く見えたが、強ひて人に媚びるやうな態とらしい取りなりが河原者らしい卑しさを現してゐた。團十郎は口が一文字に締まつてゐた、鼻が高く、額が廣く、頬が豊^{ゆたか}に張つてゐて、士分にしても恥づかしからぬ容貌を備へてゐた。その目は何人も容易に近づくべからざる威嚴を持ちながら、如何なる人をも引きつけずには置かぬ溫情を持つてゐた。その態度

には武ばつた内に優しみがあつた、謹嚴の中に寛濶があつた。かれは弱年であつたが、既に老匠の貫祿を備へてゐた。

「秋の菊の冷たさでもない。春の櫻の浮かれ心地でもない。夏の牡丹の氣高い花やかさだ」江島はさう思ひながら、團十郎の紋から顔へと惚れ／＼とした目を移した。卑賤に生れて高貴に育つた江島には、艷容に氣品を兼ね備へた團十郎が誰よりも先づ氣に入つたのである。かの女は生れて始めて、「男」を戀しいと思つた。

併し、「男」の方で女ざかりの江島が美しさに心を動かしたのは、團十郎でなくて新五郎であつた。新五郎は寶永三年に尾州家の未亡人天龍院に通じて仕置を受けた弟の生島大吉から、屋敷方の女中の下々の浮かれ女などとは又變つた味のある事を、幾度となく聞かされてゐた。かれはその時分から弟のしたやうな「冒險」を自分も一度はして見たいと願つたゐた。かれは藝人らしい好奇心から、どうかして一度高貴の婦人に近づきたいものだと思つてゐた。「お女中もずっと高い所なら、露顯をしたところで、たいした咎めは受けまい。現に大吉などは、相手がお上の御親類だつたせいにか、たつた五貫文の科料で済んだではないか。出牢してから氣の狂つたのは、あいつの膽つ玉が小さいからだ」新五郎は極めて手輕にかう考へてゐた。

新五郎は計らず日頃念ずる貴婦人の前に出る事が出来たので、精々恐れ入りながらも、窺に看察を怠らなかつた。鼻筋の通つた、嚴めしく口元の締まつた、利口らしい目の絶えず鋭く働く美しい婦人である。年は確に三十を越してゐるが、濃化粧の白粉の下にも、また初心らしい皮膚の清さが隠されないで

ゐる。片はづしに取り上げた緑の髪の艶々しさ。笄の花飾り。白綸子に金糸糸で濱邊の貝盡しを總縫入にした袷に白羽二重を重ねて、段織の付帶をした品の好さ。白天鵲絨に紫の藤の花を縫いつぶしにした五寸ぐらゐ幅のあるはこせこを稍長目に引き出された懷の大様さ。はこせこの間から同じ藤の花の彫のある銀平打が覗いてゐて、房にたとへた長い銀の飾りが帯の中段まで垂れてゐる風情。玉蟲色になるまで紅を濃くつけた唇から、時々洩れる漆のやうな鐵漿の色めかしさ。袖口からも懷からも鼻をついて来る得ならぬ薫り。新五郎は唯もう酔心地になつて、「どうかかういふ方の御最負に預りたいものだ」と思つた。

併し、團十郎の方は全く別の事を考へてゐた。かれは一刻も早くかういふ席が去りたいと思つた。かれは十年前に父の横死を目のあたり舞臺の上に見てから、深く自ら決する所があつた。かれは苟も情事らしい事には決して關ふまいと思つた。決して若衆歌舞伎の亞流を汲まずに、飽くまで技藝で身を立てようと思つた。敬愛する母の榮光尼からも、常々御殿女中などには近づくなと戒められてゐた。

二人は挨拶に來たばかりで直ぐ又樂屋へ歸らなければならなかつた。三番目の出端が迫つて來てゐたのである。江島は又不快に思つたが、始めての事ではあり、大勢の見物をも待たしてある事なので、こればかりは自由にならなかつた。

團十郎はさつさと樂屋へ歸つて了つた。新五郎は残り惜しげに座を立つて、見返り勝ちに廊下を樂屋の方へ向つて行くと、ふと奥山交竹院に會つた。

『三浦屋、久しぶりの。』

『これはお兄い様でございましたか。いつも御不沙汰ばかり申し上げてをります。』

新五郎の妻お竹は交竹院と一腹一生の兄妹なのである。お竹は元或小さな屋敷の奥向きに奉公してゐたのであつたが、新五郎の容色に溺れて、その屋敷を抜け出した爲に、交竹院からも喜内からも勘當されてゐたのを、その頃三味線浄瑠璃の師匠をしてゐた中村清五郎の取りなしで許され、今では新五郎の妻になつて、糸太郎とい男の子まで儲けてゐるのである。

『よう御見物にお出でなされました。』

『けふは愚老主人役でな。お城の女中方をお招き申したのだ。』

『では、只今わたくしの御挨拶に出ました……』

『さうだ。あれは江島様といふ御母公附のお年寄で、當時お城では筆頭第一のお女中だ。』

『では、餘程貴いお方なので。』

『先づ御老中若年寄と雖も、頭の上がらぬお方だ。』

新五郎は今見た女中が、思ひも及ばぬ高貴な婦人であるのを知つて、愈々好奇心を挑發されると同時に、それが義兄の交竹院と入魂であるらしいのを見て、愈々野心を刺戟された。

『どうか山村座御最負に相成るやう、お兄い様からもお詞添へを願ひます。』

『宜しい。承知致した。時に、けふは喜内も參つてゐるぞ。』

『左様でございますか。存じませぬ事とてつひまだ御挨拶にも上がりませんでございましたが、どちらにお出ででございます。』

『下棧敷だ。』

新五郎はこの際喜内の歡心をも得て置きたかつたので、急いで喜内のところへ挨拶に行つて、それから樂屋へ歸つた。

間もなく三番目の狂言は始まつた。山中平九郎が愛護の若の師匠野村安右衛門、團十郎が大道寺田畑之介である。安右衛門が硯の水をつがせようとすると、田畑之介は大に怒つて、手水石をさし上げて水をつぐ。やがて、安右衛門が夢に蛇になつて鶉を食ふと、田畑之介はその頭を抑へつけて石で叩き殺す。安右衛門が悪夢から目を覺まして、『頭ぶつた夢を見た。』と言ふので、田畑之介はふと氣がついて、これを睨みつける。

宮路や梅山は頻に興に入つて、やれ平九郎の憎態にくていな所が好いとか、やれ團十郎のりきみやうが好いとか言つてゐたが、江島はひとり樂しまなかつた。

江島は舞臺の上の團十郎を群集と一緒に見るよりは、生地なまの儘の團十郎を自分一人で見たかつた。併し、その團十郎はさつき一寸挨拶に來たばかりで、もう今は總ての見物の所有物になつてゐる。

江島は交竹院を呼んだ。

『はじめてのせいが大層勞れました。皆の者はここへ置いてよい程に、わたし一人茶屋へでも行つて休みたいと思ふが。』

『それは御大儀でございます。では直ぐ御案内を。』

江島は交竹院、清五郎、平右衛門などを連れて、狂言なかばに茶屋へ引き上げた。來た時も一寸寄つ

た山屋といふ茶屋である。

『交竹院どの、わたしは成田屋が大層氣に入りました。もう一度これへ呼ぶわけには参るまいか。』

『なんの造作もない事でございます。なあ清五郎。』

清五郎は頷いた。

『参る段ではございませぬ。家の譽でございます。では私が直ぐ呼んで参りませう。』

さう言ひながら、清五郎が二階を駆け降りると、下には津賀屋と出羽屋が心配さうな顔をして待つてゐた。

『御上客様はどうなさいました。』

『もう一度成田屋に會はうと仰しやるのだ。』

津賀屋はほつと息をついた。

『それで安心した。わしは又何かお氣に召さぬかと思つて、大抵心配した事ぢやありません。では師匠何分宜しく頼みます。骨折はいくらでも出さうから。』

そこで、清五郎は直ぐに樂屋へ行つたが、勿論團十郎は舞臺へ出てゐて、部屋にはゐなかつた。暫く待つてゐると、役をしまつて歸つて來たので、直ぐその事を頼んで見たが、團十郎は聞かなかつた。

『さつき一度御挨拶に上がったのだから、あれでもう御免が蒙りたいな。一體あれは女中方の所へ御挨拶に出た事はないのだが、お城の重いお役だと聞いたので、あれでもあれは大張り込みで出かけたのだ。』

『でも、大層親方御最負になすつて、是非もう一度連れて來いと仰しやるんですから。』

『それは駄目だ。もう直ぐあとの顔にも掛からなけりやならねえから、どうか巧く斷つて呉れ。』

團十郎は何と言つても聞かなかつた。清五郎は困つた事になつたと思つたが、相手が位のある役者だけに、どうする事も出来ないで、すご／＼茶屋へ引返すと、冷汗を拭き拭き、その趣を江島に傳へた。『左様か。舞臺がいそがしいといふのでは仕方がない。』

江島は色も動かさずにかう答へたが、心の内は未練で未練でならなかつた。

交竹院は茶屋に命じて、又ここでも酒宴に座を取り持つのであつたが、江島はもう楽しまなかつた。『勞れてゐますから、もう芝居へは行きますまい。これから直ぐにお城へ歸ります。』

暫くすると、江島は如何にも惱ましげな顔をして、かう言つた。江島が歸るといふのに、外の者が見物してもゐられないので、それでは一同に「お立ち」といふ事になつた。

江島はその日終に樂しまずに大奥へ歸つたのである。

(六)

津賀屋と出羽屋は折角の思ひで芝居へ招いた江島が面白からぬ様子で歸つたので、ひどく氣を落した。

『困つたなあ、出羽屋。どうしたものだらう。』

『この分ぢやあとてもお望みは叶ひません。もう一度芝居見物を催すのでございますな。』

『だが、さう幾度も芝居へお招きをしたところで、又こなひだのやうな事になつて了つては水の泡だか

らな。』

『でも、こなたは三浦屋や成田屋が碌々お相手を申し上げなかつたのがお氣に召さなかつたのですから、今度は一つ清五郎さんにも骨を折つて貰つて、是非ゆつくりお相手をさせる事にするのです。』

『成程、さうすれば好いかも知れないな。』

『そこで、さう度々奥山様のお催しといふのも異なものですから、今度は一つ金井様へお願いして、小普請奉行様のお振舞といふ事にするのですな。』

『成程、お前は中々味な所に氣がつかぬ。それでは早速御進物を調へるから、お前は金井様お屋敷へ行つて呉れ。おれは奥山様へ御相談に上がるから。』

かう相談がきまると、即日二人は津賀屋の店を左右へ別れて出た。

津賀屋は再び夥しい進物を携へて、飯田町の屋敷に交竹院をおとづれた。

『いつも鄭重で痛み入るの。』

『どう仕りまして。』

『時に、過日は首尾ようお年寄のお取持が出来て祝着だつた。』

『どう致しまして。大しくじりを致しました。』

『なぜの。』

『お歸りの御様子では、お腹立のやうだつたではございませぬか。』

『なに、さしたる事もない様子だ。一體お城女中などといふものは、世間知らずの我儘者が多いから、や

たらと疳癬を起すが、あれで御心中は餘程お嬉しいのだ。』

『左様でございますかな。時に、もう一度催さうと存じますが如何なものでございませう。』

『宜しからう。』

『今度は金井様のお振舞といふ事に致しまして。』

『成程。併し、今度はもつと立つた役者にゆつくりお酒のお相手をお勤めさせなければいかぬな。』

『その儀でございます。江島様は大層成田屋が御最負のやうでございするな。』

『なに、成田屋一人に限つた事はない。誰でも立役なら御氣に召すのだ。』

交竹院がかう答へたのには隠れた意味があつた。かれは江島が團十郎に氣のあるのを知つて、それを不快に思つてゐるのである。かれは自分が江島に思を寄せてゐるのであつた。

『一體、成田屋といふ奴は、河原者の癖に氣位が高くて、愚老などは嫌ひだ。藝人はやはり藝人らしい方がよい。縁引きのある愚老の口から申すと可笑しいが、そこへ行くと、あの生島新五郎だ。名物男と言はれた七三郎を真似てゐるだけあつて、如何にも柔かで、附きがよくて、どんな物堅い女中でも一度に崩れて了ひさうではないか。』

『三浦屋の親方が御親類だといふ事はあの時承りました。今度は三浦屋の親方にも一つ腕に縋りをかけて貰ひたいと思ひますから、先生からも宜しくお頼みなすつて下さいまし。』

『精々骨を折つて貰ふ事にしやう。それから今度はお供の女中方にも、それ／＼お相手になりさうな役者を出さなければいかぬが、それらの事はやはり清五郎に相談をするがよい。』

『畏りましたか。色々と御親切に有難う存じます。今度は一つお氣に召すやうにして、お流れ位は頂戴致したいものでございますな。』

『その方は、萬事愚老の方寸にあるから。』

『はい。有難う存じます。』

津賀屋は例によつて、進物に相當するだけの智慧を貰つて歸つた。

一方、出羽屋源七は津賀屋から預かつた樽代金百兩を持つて、金井六右衛門を糺町の住居に訪ねた。六右衛門は出羽屋の頼みを聞くと、直ぐに引き受けた。

『宜しい。承知致した。併し、知つてもゐようが、同じ御本丸とは言つても、お表と大奥とは御錠口といふ嚴重な仕切りがあつて、常は容易にお目通りが出来ぬ。何かの折を見て申し上げる事にしようから急いではいかぬぞ。』

『ええ、もうそれは御都合でいつでも宜しいのでございます。何しろ城内八ヶ所の御用を足さうと申すのでございますから、大仕事でございます。決して、いついつなどといふ事は申し上げませんから、何分宜しくお願ひ申し上げます。』

源七が諏訪町の店へ歸ると、善六はもう先きへ歸つて待つてゐた。そこで、今度は二人揃つて、作者の清五郎を訪ねた。清五郎は手土産として三十兩の金を津賀屋から貰ふと、恭しくそれを頂いて、神棚の上へのせた。

『こないだはちと「とちり」でしたが、こんだは狂言をうまく書いて御覽に入れます。成田屋はあんな人

で、とても話になりませんから、こんだは三浦屋にうんと骨を折つて貰ひます。それから、山村だけではとても好い所が揃ひませんから、こんだは森田や中村や市村からも色つばい所を引つて抜いて来て、外のお女中の方のお相手をさせませう。幸、手前は葺屋町の「部屋」に名前がありますから、さういふ事には萬事都合が宜しうございます。それから、今度は山村の太夫元を味方に入れなけりやあいけません。何といつても金方きんかたですから、役者はやつぱりあの人の言ふ事を聞きます。それから、手前家内のお梅でございますが、あれは紀州様へ御奉公をしてゐた時分に、江島様を存じ上げてゐたと申しますから、今度はあれに女中の方のお取持をさせようかと思ひます。』

津賀屋と出羽屋は、清五郎のこの用意周到な畫策を聞くと、やつと安心して、家へ歸つた。

小普請奉行の金井六右衛門は、どうかして江島に一度會ひたいと思つたが、中々その折が來なかつた。兎角する内に、五月も過ぎ、六月も過ぎた。

七月十一日の事である。幼年の將軍は濱御殿へ成られて、「殺生のお慰み」を遊ばされた。その時、小普請奉行はやつと江島と詞を交す機會を得た。

『先達て芝居御見物の折は、何かお心に叶はぬ節がござりましたさうで、御同道申し上げたそれがしまで、何か物足りぬ心地で歸邸致しました。就いては近日それがし催主となつて、今一度見物致さうと存じまするが、思召もござらば御出での程願はしう存じます。』

江島は金井にかう言はれると、處女のやうに顔を染めた。江島は四月以來、一日も團十郎の事を思はぬ日はないのである。

『芝居はどこへ参るのぢや。』

『やはり山村座が宜しからうと存じます。』

山村座は丁度この時益の芝居をあけてゐた。狂言の名題は『善光難波池』である。併し、團十郎は太夫元との間に面白からぬ事があつて、芝居を休んでゐた。春の「助六」が大當りだつたので、給金の値上げを追つたところが、それが聞かれなかつたのである。非業の死に父を失つてから、殆ど十年近くも劇場の冷遇を受けて來たかれは、一刻も早く親團十郎と同じ地位まで進みたいと思つてゐたのである。

江島は團十郎の缺勤を知つてゐた。

『併し、今度は成田屋が出ぬといふ事ではないか。』

六右衛門は少し狼狽したが、さりげない態でかう言つた。

『芝居は休んでゐますが、お取持には参る事になつてをります。』

『それなら、参つても宜しい。丁度十六日には魂祭のお宿下りがあるから、飯田町の方は早く済ませて、その方へ参る事にしませう。』

金井はその晩直ぐその趣を淺草の津賀屋へ傳へた。津賀屋は直ぐ清五郎の所へ駆けつけた。清五郎は直ぐ山村長太夫の所へ駆けつけた。

長太夫は若い野心家であつた。かれの妹は町奉行丹波遠江守の奥向うへ勤めてゐた。かれの一家はその縁故で町奉行の恩顧を蒙る事が多かつた。長太夫は常々丹波様の威光を借りて、何か一山當てたいものだと思つてゐた。ところへ清五郎の話を聞いたので、直ぐと乗氣になつた。江島に満足と與へて置け

ば、月光院へも取り入る事が出来よう。若しそうなれば、表向には町奉行といふ後見もある事だし、どんな大望でも叶はぬ事はあるまいと思つたのである。かれは直ぐ清五郎に相談をして、芝居から自分の家の二階へ直ぐに通れるやうな忍びの道を作る事にした。京橋五丁目で中田屋といふ湯屋をしてゐる隠居の父友碩の許へも、早速巨細の相談をしに行く事にした。

清五郎は直ぐその足で生島新五郎を訪ねた。新五郎は話を聞くと、躍り上がつて喜んだ。

『そいつあ有難い。今度はからだも樂な事だしするから、精々骨を折つて見よう。如何にお城女中だつて、女はやつぱり女だ。俺もその道へかけちやあ、なあ清五郎さん。』

『左様でございますとも。なんしろ、お金になつて、あんな豪勢な女を酒の相手にして、その上うまく行さやあ、ねえ親方。』

『考へて見りやあ、弟の大吉なざあ馬鹿だつたよ。呉服物の長持へなを隠れて行つて、あんな苦しい思をして屋敷へ這入つてよ。その揚句がお仕置といふのだからな。俺なざあ黙つてゐても、こんな運が向いて来るのだ。』

『左様でございますとも。なんしろ、相手がお年寄といふお城女中でもずつと重い所なのですから、ちつとやそつとの事があつたつて、お咎めになぞなる氣遣ひはございませんし、こんなうまい話はありやあしません。』

清五郎は散々に水を向けて置いて、さて急に鬱いだ顔をした。

『時に親方、一つ困つた事があるのですが、實は成田屋さんでございますね。この前親方と御一緒だつ

たので、こんだも是非お取持に出て貰はないと困るのですが、芝居の方があんな工合になつてゐますし、どうしたものだらうと實は心配をしてゐるのでございます。なんとか親方のお力で、引張り出す工夫はないものでございませうか。』

『なあに、直ぐ出て来るだらうよ。どうせ發句でもひねつて遊んでゐるんだらうし、太夫元へは氣まづくつても、これはこれで又場合が違ふからね。第一家門の譽だな。あしたにも訪ねて行つて、話して見よう。』

新五郎は何の造作もないといふ顔をした。そこで、清五郎も心では危みながらも、幾分の望みを繋いで、生鳥の家を辭した。

明くる日、新五郎は芝居を濟ますと、團十郎を訪ねて、早速その話をした。併し、團十郎はやつぱり首を横に振つた。

『どうか親方、その事だけは勘辨して下さい。あつしも親方のお引き立て一つで、やつと今日こんにちになつたやうなわけで、言はばまだひよつ子も同然、ちつとでも油斷の出来る年ぢやありません。親方の前で言ふのも異なものです、あの半六めに親父がやられた時のくやしさは未だに忘わすれは致しません。それといふのも、元の起りは女からでございます。あつしも家業の事でございますから、唯厭だなあ申しませんが、お屋敷方のお女中などには決して近づくなど常々お袋にも言ひつけられてゐますし、芝居もあんな事で休んでる時ですから、どうかこんだの所は親方から宜しくお詫びをなすつて置いて下さいまし。』

團十郎はかう言つたぎり、もう新五郎がどう詞を代へて頼んでも聞かなかつた。

新五郎は團十郎の来る來ないを心配したのではなかつたが、かれ一人が來ない爲にこの催しが取やめにでもなつたら大變だと思つたのである。そこで、清五郎の方へは成田屋も来る事になつたといふ返事をした。當日になつて、何とかごまかせば、それで済むと思つたのである。

山村長太夫が芝居の二階棧敷の突當りと自分の住居の二階との間に、每晚秘密で特別工事を加へてゐる内に、早くも七月の十六日は來た。

例に依つて、朝暗い内から、津賀屋と出羽屋が出向いて来る。やがて、當日の主人役たる金井六右衛門が駕籠で乗りつける。清五郎が女房のお梅を連れて来る。交竹院が喜内と同道で来る。白井平右衛門と豊島平八郎と西與一右衛門が袖を連ねて来る。その内に、江島を初めとして、いつもの女中達が、青や赤の鉦打駕籠を急がせて來た。

女中達は棧敷へ這入ると、みんな釣御籠へ背を向けて座つた。この日はもう初めから芝居は見ないで、いきなり酒宴にかゝる積りなのである。やがて杯盤の用意が整ふと、かねて清五郎が頼んで置いた他座の役者が、追々と艶めかしい姿を運んで來た。葺屋町の市村竹之丞座からは瀧井半四郎を筆頭として、山中刈藻、坂田采女之丞、竹中吉三郎などが來た。堺町の中村勘三郎座からは袖岡庄五郎、岸田妻菊、藤田小吉三、同じく花之丞などが來た。木挽町の森田勘彌座からは筒井歌之助が一人で來た。いづれも振袖に紫帽子の若女形ばかりである。酒宴は直ぐと始まつた。朱塗の盃は女の唇から男の唇を移つて歩いた。

清五郎はお梅を江島に引き合せた。

『手前女房お梅と申します不束者でござりまする。以前、櫻田御殿に上がつてをりました頃、度々お見上げ申したさうにござりまする。』

『左様か。それはよい話相手ぢや。』

江島はお梅に見覚えがあつたが、わざと忘れたやうな顔をした。

好い頃を計つて、交竹院が津賀屋を連れて來た。

『これは淺草諏訪町に住居致す諸家御用達津賀屋善六と申す者でござります。先だつては愚老が亭主分となり、今日は又六右衛門を頼んで催主と致しましたが、實はいづれもこの善六が振舞なのでござりまする。』

江島はさして驚かなかつた。慧眼なかの女は初めからそんな事であらうと推測してゐたのである。

『さては左様であつたか。度々の馳走、過分に思ひますぞ。』

江島はかう言ひながら、善六に盃をさした。津賀屋が有難さに震へながら盃を受けるのを見ると、江島は懷から沈香の服紗包を取り出して『これは當座の引出ぢや。』と言つて善六に與へた。

津賀屋が面目を施して退くと、入れ違ひにこの座の「野郎」藤村半太夫、葉山源次郎、三條勘太郎、市川富三郎などが挨拶に來た。五間を打ち抜いた廣い棧敷も、多數の男女で身動きも出來ぬ程になつた。

盃を廻らす毎に、女の肩は男の肩に觸れた。銚子を取り次ぐ毎に、男の膝は女の膝を突いた。酒の香と脂粉の香は御簾を溢れて、下にゐる見物までを酔心地にした。

江島は盃の數を重ねたが、少しも酔はなかつた。かの女は窃に團十郎の來るのを待つてゐるのである。團十郎の來るまでは、酔つてはならぬと心を引き締めてゐるのである。かの女は初心らしく胸を轟かせながら、階子口の方ばかり見詰めてゐた。

暫くすると、新五郎がそこから姿を現はした。相變らず艶めかしい柔かな取りなりである。殊にけふは樂屋銀杏の毛筋一つ亂さず、ほんのりと薄化粧した顔の美しさが、一しほ女中達の目を引いた。

江島は自分の前にひれ伏した新五郎に盃をさすと、直ぐにかう聞いた。

『成田屋はどうしました。』

『芝居を休んでをりまする。』

江島は新五郎にかう言はれると、もうあとを聞く勇氣がなかつた。六右衛門を呼んで、聞いて見ようかと思つたが、それもはしらないと思つた。千人餘の女子を願使するかのも、男女の情にかけては、まだそれ程羞恥を帯びてゐたのである。

かの女は唯黙つて盃を重ねた。新五郎は取持上手に四方山の話をしてながら、又つく／＼と江島の姿に見惚れた。白の越後縮に鐵砲百合の總縫をした帷子が、丈のある體からだに似合つて、春の時よりは又一しほ艶である。心持上氣をした頬には、河原撫子の清淨な美しさがあつた。

暫くすると、江島は又新五郎に聞いた。

『成田屋は挨拶にも來やらぬか。』

一度は言ひ紛らした新五郎も、今度は何とか斷りを言はなければならなかつた。

『そればでございます。昨日までは伺ふと申してゐたのでございますが、昨夜から急に母親のからだが悪くなつたさうにございまして。何しろ、御存じの通りの親孝行者でございますから。』

江島は新五郎がまだ何か言はうとするのを、もう澤山だといふ顔をした。かの女は新五郎の目の色に直ぐと「嘘」を見破つて了つたのである。

『それではどうも致しやうがない。』

江島は捨てるやうにかう答へたが、心は未練で煮えくり返るやうであつた。「團十郎は確に自分を避けてゐるのだ。」さう思ふと、ぢり／＼と癪が立つて來た。かの女は新五郎の手から、いきなり盃を奪ふと立て續けに二三杯酌をさせた。

新五郎は「やつと機會が來たな」と思つた。江島の團十郎に氣のある事は、かれも薄々悟つてゐたのである。それ故、女が急にかうした捨鉢らしい態度に出たわけも、かれにはよく分かつてゐた。分かつてゐながら、分からぬやうな振りをした。分らぬやうな振りをしながら、その虚に附け入らうとした。女を扱ふに馴れた新五郎は、「どつちにしても女の心がぐらついて來れば、もうこつちの者だ」と思つたのである。

かれは舞臺でする通りな艶めかしい笑ひやうをしながら、段々親しげな口を利き始めた。

『お見事。お見事。お見事ついでにもう一つ。』

『もうさうはたべられぬ。』

『たべられずば、お呑み込みなされませ。』

『呑み込まうにも、胸が苦しい。』

『思ふ心の通らねば、姫はお胸の苦しさに。でござりますか。は、は、は、は。』

江島は團十郎が来ないと聞くと、張り詰めてゐた氣を一度に緩めたので、抑へ抑へてゐた酔が一時にかつと發して來た。そこへ二三杯、立て續けにやけで飲んだのが、身に泌み入る程利いたところへ、又新五郎の勧め上手に手を持ち添へられて、三四杯盃を重ねたので、もう居すまひが崩れる程酔つて來た。

宮路、梅山、木曾路などの酔ひやうは更に激しかつた。かれらが「野郎」達と笑ひさざめく聲は、屢々舞臺にゐる役者の臺詞を妨げた。「東西。東西。」といふ罵るやうな聲が、時々下の見物から起つた。

折よしと見た新五郎は江島に向つてかう言つた。

『大層お勞れの御様子でござりますが、如何でございませう。實はこの棧敷から直ぐに太夫元の二階へ參れる忍びの道があるのでございます。これはかねて太夫元が、貴いお方のお忍びでお出での折、御休息の爲に拵へて置いたものでございます。御退屈なら、暫くそこへお越し遊ばして、御休息遊ばしたら如何でござります。』

江島はそれがけふ新しく出來たものだとは夢にも知らなかつた。

『それは一段の事ぢや。そなた案内してたもるか。』

『直ぐに御案内申し上げます。』

『併し、一人立つも何とやら心苦しい。宮路殿を連れて行きませう。』

『御中老様お一人なれば宜しうございませう。あまり御人數だと座敷、手狭でござりますから。』

新五郎はかう釘をさして置くと、さつきから宮路と睦ましく盃を交してゐた瀧井半四郎を小手招きた。

江島が宮路に目配せをしながら座を立つと、宮路は直ぐその側へ来て、手を取つた。

棧敷の突き當りまで行くと、三尺の忍びの戸口があつた。新五郎がその戸をこつ／＼と叩くと、中に待ち受けてゐた長太夫の父友碩が戸を開いた。這入つて見ると、七間の部屋を三つに仕切つた綺麗な座敷である。まん中の座敷には、既に杯盤の用意が出来てゐた。左右の座敷には、金屏風が立て廻らしてあつた。

江島達がまん中の座敷へ座ると、下から長太夫が上がつて來た。

『當座毎々の御最負有難う存じまする。お勞れとは存じまするが、當座一同に代りまして、粗酒一献差し上げたう存じ上げまする。』

江島はここへ來ても、又盃を取らなければならなかつた。

暫くすると、江島は堪らなくなつて、宮路の膝に突つ伏して了つた。

『大層お苦しうな御様子ですが、どこぞにお休みになる所がありますまいか。』

宮路が内々悟つてゐながらかう聞くと、新五郎は直ぐと立ち上がった。

『わたくしが御案内申し上げます。』

江島は宮路に抱いて起されると、よろ／＼として、思はず新五郎の手を握んだ。新五郎はその手を堅く握つて放さなかつた。

二人が右の金屏風の蔭へ、吸ひ込まれるやうに姿を隠したのを見ると、宮路も額へ手を當て、惱ましげに眉を顰めた。

『あなた様もお休み遊ばしますか。』

半四郎がかう聞くと、宮路はいきなりかれの肩に縋つた。

二人が左の金屏風の蔭へ隠れると、長太夫は眞面目に安心したやうな顔をして、階子段を下へ降りた。

江島と宮路が棧敷を消えると、清五郎夫婦の案内で、一同は山屋の二階へ引き上げた。そこには既に又新しい酒宴の用意が出来てゐた。

白井平右工門や豊島平八郎などは、近所の「子供屋」から「かげま」を呼んだ。染色の振袖を着て巾廣の帶をしめた女装の美少年達は、黒い塗下駄を鳴らし連れて來た。

中老の本曾路は役者の袖岡庄五郎に戯れた。御表御使番の梅山は中村源太郎を愛した。御内證御使番の吉川は筒井歌之助を放さなかつた。交竹院は誰彼を問はず、美しい女中達の間を戯れて歩いた。

一人の女を二人の男が争つた。一人の男を二人の女が争つた。更に一人の男を一人の女と一人の男が争つた。この淫らに物騒がしい酒宴を、更に亂りがはしくするものは、清五郎夫婦の淫靡を極めた歌三味線であつた。

(七)

江島は計らず新五郎の情を受けて、思ひもかけぬ嬉しさに身を悶えたが、心は依然として圓十郎を思ふのであつた。

山村座の七月狂言は、團十郎が出ないばかりに、氣の引ける程客足が薄かつた。狼狽した長太夫は、日に幾度となく成田屋を訪ねるのであつたが、團十郎は容易に出勤を肯じなかつた。

「霜月の親見世狂言からは、きつとち望み通りの御給金を出しますから。」

この條件で、やつと興行の途中からかれが出る事になつたのは、もう七月の廿四日だつた。團十郎は初め自分の役だつたのを今まで新五郎が間に合せて勤めてゐて呉れた本多善光に扮して、山中平九郎の藤平と外記節に合せて紅葉狩の所作をするのである。

團十郎が出ると聞くと、江島は急に又山村座が戀しくなつて來た。そこで、宮路と相談して、今度は自分達の催しにする事にした。

「いつもち芝居ばかりでも興がございせんから、今度はち歸りに舟遊びを遊ばしたら如何でございませう。」

宮路のこの案は一層江島を喜ばせた。

江島は直ぐと飯田町の兄の所へ手紙を書いて、来る廿七日には自分達で山村座の見物を催すから、何かの用意を頼む。歸りには船遊びをも催す筈だから、その方の事も宜しく取り計らつて置いて貰ひたいと言つてやつた。

白井平右衛門はこの手紙を見ると、義弟の豊島平八郎を誘つて、早速二人で津賀屋を訪ねた。善六は話を聞くと、可笑しい程二人に禮を言つた。

「よく知らして下さいました。これを知らずにゐた日にやあ、諏訪町の津賀屋も飛んだどちを踏むとこ

ろでございました。皆様のお蔭様で、城内二ヶ所はもうこつちの物になりかかりました。今が肝心の所でございますから、そのお催しは是非わたくし共にお任せが願ひたうございます。きつとお氣に召すやうにして御覽に入れますから。』

二人は元よりその積りで來たので、萬事を津賀屋に任せて歸つた。

二人が歸ると、善六は直ぐ源七を呼び寄せて、二人で山村長太夫を訪ねた。そして、芝居を特に明六つから始めて、八つ前にはかぶるなうにする事だの、客の船は二艘にして、別に一艘役者ばかりを載せる船を眺へる事だの、今度は是が非でも團十郎を引つ張つて行く事にする事だのを、夜の更けるまで相談した。

當日はぢきに來た。見物の一行も、見物の様子も、いつもに少しも變りはなかつたが、唯著しく變つたのは、酒の相手に來る役者達の女中に對する態度であつた。かれらは最早かの女達を、恭々しくのみは崇めてゐなかつた。或役者は或女中を情婦か何ぞのやうに扱つた。或役者は或女中を遊び女か何ぞのやうに扱つた。役者の使ふ傳法な詞を、女中も學んで使ふのがあつた。

江島も始めて食べた禁制の木の實の味を忘れる事は出來なかつた。かの女は新五郎の顔を見ると、今までにない誘惑の力を感じ、今までにない服従の念が起つた。併し、かの女はまだ「心」の總てを新五郎に與へる事は出來なかつた。かの女は舞臺に出て來る團十郎を見る度に、遣る瀬ない胸を悶えた。それ故、新五郎が幾度かの女の側へ來て、目ませで忍びの戸口をさしても、かの女は決して應じなかつた。

新五郎は江島の心をよく知つてゐた。この日の見物の意味をも十分悟つてゐた。併し、かれは決して

悲しまなかつた。かれは一旦江島の年に似合はず初心なのを確めてからは、悉く心を安んじて了つたのである。既に男を知つてゐる女は、手に入れるのはやさしいが、手に入れてから後がむづかしい。まだ男を知らぬ女は、手に入れるまでがむづかしいが、一旦手に入れたら、もう安心なものだ」女に経験の多い新五郎はこんな風に考へてゐた。かれは女の心が外の男で亂れれば亂れる程、女に味が出て來て好いと思つた。かれは團十郎の決して江島に靡かぬのを知つてゐた。

芝居は幕を急いで、豫定通り八つ前には済んで了つた。一行は清五郎夫婦の案内で、三十間堀から本材木町の川岸を、江戸橋までぞろ／＼と歩いて行つた。

そこには二艘の華美な遊山船が用意されてゐた。一艘を川一丸といひ、一艘を若松丸といふ、いづれも屋形船である。川一丸には紺赤幅交りの幕が張つてあつて、船頭は紅樺に腰は敷瓦、背中に浮線綾の紋のついた一重を着てゐた。若松丸には紫赤白幅交りの幕が張つてあつて、船頭は薄柿に三階松の紋、腰は石疊の一重を着てゐた。女達と男達が、二つの船へ分かれて乗り込むと、これに二艘の臺所船がついて、賑かに棧橋を離れた。

鑑の渡しを通り過ぎて、靈岸橋を右に見ながら、くづれ橋を潜つて、箱崎町の川岸へ出ると、そこに又一艘屋形船が待つてゐた。木挽町、葺屋町、堺町四座の役者をすぐつて載せた船である。この船には淺黄赤幅交りの幕が引き廻してあつて、船頭は淺黄に左巴の紋、裾は薄柿に紺の格子を染め出した一重を着てゐた。

新五郎がゐる。半四郎がゐる。袖岡庄五郎がゐる。中村源太郎がゐる。殊に珍らしいのはこの艶めか

しい男達の中に、黒つばい地味な一重を着た團十郎が、眞面目な顔をして扣へてゐる事であつた。

『あまり素氣なくしても家業に障らうぜ。けふは役者ばかりが一つ船に乗つて行くといふのだから、是非とも附き合つておくんなさい。若し挨拶がしたくなきやあ、挨拶をしねえだつても濟むんだから。』

團十郎は先輩の新五郎にかう言はれて、どうにもこの日は斷り切れなかつたのである。

役者達は二艘の船の姿を認めると、手拍子面白くこれを迎へた。三艘の屋形船が、花やかな幔幕に涼しい川風をふくませながら、舳艫相街んで大川筋へ出ると、船頭達は聲を合せて船歌を唄つた。

新大橋の下を潜る頃、最後の一艘から俄に太鼓三味の賑かな騒ぎが起つて來た。立つて舞ふものがある。坐つて唄ふものがある。女中達もこの趣向に興を促されて、思はず前の船から囃し立てた。日はまだ高かつた。金色な日の光と花やかな船の飾りと艶めいた女中役者の装ひとが、川の水に亂れ映つて、目も眩めくばかりであつた。

お舟藏を右に見ながら、船はしづ／＼と上へ登つた。兩國橋を越えて了ふと、行く手は漫々たる角田川で、もう目を遮る橋もなかつた。三艘の屋形船はいつか横に列んで進んでゐたが、暫くすると、誰の命令でか、一緒にびたりと船足を留めて了つた。忽ち船から船へ舳がつけられた。男の船から女の船へ行くものがある。女の船から男の船へ行くものがある。男女入り亂れて酒宴を催す内に、船は舳をつけた儘で、又川上へ動き出すのであつた。

團十郎は今更逃げもならず、自分達の船へ侵入して來た女中達の中に狹まれながら、迷惑さうに盃を嗜んでゐた。江島は隣の船から、その様子を見て、はしたなく身の投へる目下の女中達を羨んだ。かの

女は唯早く何かの機会が来ればと、心に念ずるばかりであつた。

淺草御藏を左に見る頃、不意に役者達の船から罵るやうな聲が聞こえ出した。何が事の起りであつたか、交竹院と團十郎が口論を始めたのである。

「かりにも御本丸のお女中様方だ。河原者の分際で、御最負になるのが嬉しくないとは何事だ。」

「なんの勿體ない。決して嬉しくないなどとは申し上げません。唯あまりお女中達の御最負が過ぎますと、芝居道の爲に宜しくないと申し上げたのでございます。」

『芝居道の爲に宜しくないとどういふ事だ。』

『さればでございます。總じてお女中方の御最負は役者の藝にあるよりは、役者の顔かたち、色めいた取りなりなどにあるやうでございます。同じ芝居を御見物下されますにしても、お女中方は「役者」の内に「役」を見てやらうとはなさらずに、「役」の内に「役者」を見ようとなされます。へつらひ者の役者は又それをよい事にして、舞臺へ出てゐる役の性根などはなく、唯棧敷のお女中方へ色目流し目をする事ばかり考へてをります。これでは芝居のよくなる道理がござりませぬ。』

『芝居道の講釋、えらいものぢや。併し、芝居道がどうなうと、それをお女中方が構ふものか。』

『それだから、御最負も大抵にして頂きたいと思ふのでございます。』

『まあ河原者は河原者らしく、理屈なしに可愛がられてゐたら、それでよいではないか。』

『それが違ふのでございます。お侍にお刀がお命なら、わたくし共には芝居が命なのでございます。舞臺は戰場、樂屋は陣屋、衣裳は鎧、鬘は兜なのでございます。お女中方の御最負はなくとも、いくさは

立派にやつて行けます。』

この一言を聞くと、江島は顔色を變へた。

『清五郎、成田屋を船からおろせ。もう目通りは叶はぬ。』

江島は一言かう言つたきり、青い顔をして、震へてゐた。團十郎の正しい議論は、交竹院に分からなかつたやうに、江島にも分からなかつたのである。かの女は唯自分の威嚴の公衆の前で傷つけられたのが口惜しかつた。かの女は前後を忘れて怒つた。戀をも男をも忘れて怒つた。かの女は足をあげて「不禮者」の顔が蹴りたかつた。江島は團十郎の嚴めしい顔を受する事は知つても、團十郎の嚴めしい心を受する事は知らなかつたのである。

團十郎は駒形堂の川岸で、唯一人船をちろされた。ちろす者もちろされる者も無言である。興は悉くさめた。今まで太鼓三味に唄ひ騒いでゐた遊山船も、今は死骸をのせた船のやうな静かさになつた。この不安な沈黙を急に破つたのは、江島の上釣つた高笑ひであつた。

『あれしきの男の事で、座が白けるといふ事があるものか。不禮者故目通りを遠ざけたまでの事ぢや。心痛無用ぢや。飲みや。唄や。踊りや。』

かの女は肝高な聲でかう叫ぶかと思ふと、急に新五郎の手をとつて自分の側へ引き寄せた。そして、物狂ほしく盃を重ね始めた。

江島の機嫌が直つたと思ふと、交竹院は先づ笑ひ出した。やがて新五郎も笑ひ出した。宮路も笑ひ出した。半四郎も笑ひ出した。平右衛門も笑ひ出した。一行は忽ち又もとの亂酔と騒擾とに歸つた。

放蕩な白井平右衛門は更に一同で吉原を襲はうではないかと言ひ出した。江島は直ぐとそれに同意した。

船は聖天下の堀へ繋がれた。女官と俳優と醫師と武士と商人との、酔歩危く入り亂れた一隊は、夕暮の田町をぞろ／＼と、人目も恥ぢずに吉原へ向つた。

江島の亂行はこの日から始まつた。

團十郎に望みを裏切られた江島は、急に新五郎へ情を傾けた。かの女は清五郎の娘を喜内の娘に仕立て、これを大奥の部屋方に置いた。そして、新五郎への文使ひをさせた。

御書院番平田伊右衛門の家を中宿にして、こゝで度々新五郎とも會つた。芝居も四座を悉く見て歩いた。

御代參の折懇意になつた増上寺の寺家徳水院とも通じた。宮路の馴染瀧井半四郎にも手をつけた。終には交竹院に挑まれて、その情をも退けなかつた。

その内、江島は遊樂の費用に窮して來たので、雜司ヶ谷鬼子母神の別當から三百兩の金を借りた。併し、その金を返す事が出來ないので、かれを芝居だの吉原だのへ連れて歩いた。

二十年の禁欲は一時に破れたのである。熟し切つた木の實は地の上に墮ちたのである。蕩兒と姦婦との間に生れて、姦夫と姦婦との間に育つた「子供」が無拘束に我意を振ひ始めたのである。

月光院に心からの忠勤を勵んだ江島は今どこにも見られなかつた。かの女は巧みな辯舌で上を偽り、苛刻の命令で下を虐げた。かの女は淫奔と亂酒と貪欲と驕慢との限りを盡した。

(八)

正徳四甲午年の春が來た。

江島や宮路は山村座の初春狂言「東海道大名會我」の噂を聞いて、大奥様々の御祝儀も手につかぬ程浮足になつた。丁度そこへ月光院から御代參の命令が下つて、江島は正月十六日に芝三縁山の六代將軍文昭院殿御靈屋へ、宮路は正月十二日に上野東叡山の四代將軍嚴有院殿御靈屋へ、いづれも御命日より二日おくれに參詣をする事となつた。

好い折が來たと思つた江島は、直ぐと月光院を言ひくるめて、芝御代參の當日を、宮路と同じ十二日にして了つた。

『御代參が一日になりました。さて、見物の催しは誰に申しつけませう。』

宮路は突然江島にかう言はれて、直ぐには返事が出來なかつた。宮路は江島がもう遊樂の金子に窮してゐるのを知つてゐる。宮路は江島が如何なる催しをももう自分でする事の出來ないのを知つてゐる。江島は既にあらゆる御用達を苦しめてゐる。津賀屋も今日では城内六ヶ所までの御用を足すやうになつてゐるので、さうくは江島の言ふ事を聞かなくなつた。残る所は呉服御用達の後藤位なものであるが、これは嚴ましい御廣敷御用人が間に立つてゐるので、うつかり手はつけられぬと思つた。

『さあ、誰が宜しうございませう。』

『わたしは増上寺の別當へ申しつけようと思ひます。』

この不敵な提議には、さすが同腹中の宮路も驚いた。

「併し、お寺向きへはやうな義を。」

「悪いと言ひますか。」

宮路はもう詞を返す事が出来なかつた。

「あなたの御威光なら、芝でも否やは申すまふ。」

「さうですとも。」

江島は直ぐと増上寺の役僧へ手紙を書いた。「十二日從三位月光院様御代參の義仰せつけられ候間參詣仕候。それにつき、餘り自由がましき事には思召し候はむと察し入り候へ共、外の御馳走は御無用に遊ばされ、何卒木挽町芝居御振舞被下度候」といつたやうな文面である。

増上寺からは直ぐと返事が來た。「十二日御代參の由仰せ遣はされ委細承知致候。然るところ、木挽町芝居御振舞申候やう仰せ遣はされ候へ共、只今まで左様な事話傳へにも無之候に付、芝居の義決して相成り申すまじく候」といふ文面である。

江島がこの當然な返事を讀んで、身を震はして怒つて居るところへ、偶然來合せたのは、吳服所後藤縫殿之助の手代清助であつた。

「どう遊ばしました。大層お顔の色が悪うござります。」

清助はまだ二十三の美しい無分別者であつた。たとひ同じ御本丸にゐても、吳服所の手代づれが、苟にも大奥筆頭のお年寄に向つて、親しい口などの利ける筈はないのを、江島が平氣で清助を最負にす

るところから、清助の方でも江島の長局へ、御用人の目を掠めては、構はず出入りをするのであつた。
『清助、これを見やれ。増上寺へ芝居見物を申しつけたら、こんな不禮な事を申して參つた。口惜しいではないか。』

清助は三縁山からの返事を見た。

『お腹立ち御尤もでございます。併し、かやうな事なら、なぜ手前主人へはお申しつけになりませぬ。』
『でも、あの御用人づらめが煩さうてならぬ。』

『それはわたくしから直に主人へ申しますれば、分かる事ではございませぬ。』

清助は主人後藤がお年寄響應の機會を求めてゐるのを知つてゐた。後藤は茶屋一家と共に、幕府代々の吳服御用達を勤めて來てゐたが、前將軍の御臺所天英院が近衛家の出である爲に、追々京都の吳服商に大奥を蠶食されて來る様子があるので、少しでも多く老女達の歡心を得て置きたいと思つてゐるのである。清助はよくそれを知つてゐた。

『それではそちに任す程に、主人とも相談して萬事手落ちのないやうに。』

『畏りました。』

『芝へ參る一同と上野へ參る一同とが打揃つて行く故、人數は百人を越しますぞ。』

『畏りました。』

清助は直ぐに吳服の間へ駈けつけて、同じ手代治郎兵衛や主人後藤と相談を済ますと、早速木挽町の山屋へ出向いて、十二日の棧敷五十間に辨當百人前を誂へ、手附として即金二十兩を渡した。

正月十二日が來た。

江島は朝の五時半時に、式通りの行列を作つて、「鶴」「龜」に駕籠の兩側を守られながら、平河口の御門を出たが、もう四時半時には増上寺の參詣を済まして、宇田川町の大通りを、同じ行列で歩いてゐた。

鈍色七條の袈裟を着た二百人の僧侶が、聲を合せて五百部の讀經をする美しい法會も、この日の江島には唯倦怠であつた。いつもは別當所の饗應に、取持の若衆を物色する江島も、この日は茶一杯に席を立てて了つた。月光院から別當初め法會列席の僧へ下される筈の金七十兩銀二貫五十目をも少しで済まして、残りは悉く着服して了つた。勿論、お土産の呉服物などは殆どその儘乗物をあろさなかつた。お城装束は別當所で、手早く風流小袖に着換へて了つたのである。

柴井町、露月町、源助町を通つて、汐留橋まで來ると、江島は駕籠を降りた。ここから行列を崩して三十間堀を、歩いて木挽町へ行かうとするのである。

江島の一行が山屋へ着くと、呉服所の手代清助と次郎兵衛は、太夫元山村長太夫と共に、羽織袴で待ち受けてゐた。間もなく上野へ行つた宮路の一行も乗り込んで來た。宮路は和泉殿橋で行列を崩して、船で木挽町の河岸へ着いたのである。例によつて、直ぐ清五郎夫婦が呼ばれた。交竹院が呼ばれた。白井、豊島の兄弟も招かれた。

前代未聞の豪奢な芝居見物は始まつた。山村座の東棧敷は悉く仕切りを除かれて、そこには毛氈が敷かれ、金屏風が廻らされ、釣御簾がゑろされた。見物は江島、宮路、木曾路、梅山を初めとして、御内證お使番の吉川、沖津、御用人のおよの、およし、お小姓衆のおげん、おせんなどの外、末々の女中、

供廻りの諸士を併せて、百三十餘人の大一座である。

この日は特に長太夫の趣向で、早くから東西の窓蓋をともしびおろし、日のある内から燈火をつけた。わざと夜の態にもてなしたのである。間もなく四座の役者達が、いつもの通り艶めかしく集まつて來た。

一人として眞面目に芝居を見る者はなかつた。女中達の目的は舞臺を見る事ではなくて、役者に會ふ事であつた。江島と新五郎との間に艶めかしい盃の取り遣りが始まる時分には、一座に一人として酒氣を帯びぬ女はなかつた。酔ひしれた襦姿のしどけなさ。媚びを賣る野郎帽子の艶めかしさ。笑ひさいめく高聲は、場内總ての見物に眉を顰めさせた。

酔に前後を忘れた江島は、新五郎と戯れるはずみに、思はず盃の酒を下へこぼした。その酒を頭から浴びたのは、丁度その下棧敷にゐた松平薩摩守の家中で名を谷口新平といふ侍であつた。かれは妻子の外に仲間一人を供に連れて、忍んで見物に來てゐたのである。

薩州生れの氣早な新平は、先程から上棧敷の騒がしさに腹を立ててゐたところへ、この不禮な仕打を受けたので、一圖にかつとして、思はず刀の柄へ手をかけたが、妻子の手前もあり、遊山の場所でもあるしと思つて、穩かに仲間を遣はして上棧敷へ注意を促した。

江島の供をして來てゐた御徒目附の岡本五郎右衛門は、それを聞くと大に驚いて、様々に詫びの詞を盡して仲間を返すと、直ぐこの事を江島に傳へて、「あまり騒がしくは外見物の邪魔にも成る事故、少し御遠慮あつて然るべきかと存じます」と言つた。

江島はこれを聞くと却つて腹を立てた。「何者かは知らぬが、當方の身分をも存ぜずに使を寄越すなど

とは不禮な奴ぢや。左程われらが邪魔なら、こなたより向うを追ひ返してやるまでぢや」かう言つて江島は態と爛銅壺を覆した。二三本の銚子の酒は、根太板の隙を洩れて、一度にざつと下へこぼれた。

再び總身の酒にひたされた新平は、もう我慢をしなかつた。かれは引き留める妻子を振り切つて、足音荒く上棧敷へ駆け上がった。

五郎右衛門はこれを見ると青くなつた。場所がらもある。御法事御代参のお歸りでもある。若し珍事でも出来たら大變だと思つた。五郎右衛門はいきなり新平の前に身をひれ伏すと、先づ自分の身分と名を告げた。それから女中達の重い身分である事を告げた。そして、「唯何事も秘密の遊山故、お互に事を荒立てなば身分にも係る大事、何卒御勘辨の程、役儀を捨ててお詫び申す」と言つた。

新平は食祿八十五石の小身であつた。相手が御本丸の重い女中だと聞いては、如何に理があつても手の下しやうがなかつた。かれは公儀の役人に手をあろさせたのを、せめてもの心遣りにして、おとなしくその場を退いた。併し、かれはもう芝居を見てゐる氣がしなかつた。そこで、九つ半頃に妻子を連れて小屋を出て了つた。

江島は八つ時になると、例の忍びの戸口から、太夫元の二階へ座を移して、そこで又淫樂を盡すのであつたが、やがて七つ時にもなると、更に又山屋の二階へ移つて、供廻り總一座の饗宴を催するのであつた。

御徒目附の岡本五右工門は、始めての供ではあり、江島が餘りの大酒と亂行とに驚いて、お小人目附などとも相談の上、一刻も早く歸城を勧めようと決心したが、言ひ出す折がなくてゐる内に、もう七つ

時も大分過ぎたので、思ひ切つて其の事を言ふと、江島は忽ち腹を立てた。かの女は兎角の挨拶もしないで、猶も役者子供を呼び寄せるのであつた。

増上寺への土産だつた羽二重五疋、紅拾疋、八丈縞十二反は、役者の間に分けられた。法會の料の賄ひ残りも、役者残らずへの花となつた。

江島がやつと本丸へ歸つたのは、夜ももう五つ時であつた。嚴ましい平河口の御門も無事に過ぎた。月光院での遅刻の詫びも詞巧みに濟ませて了つた。

その夜は何の事もなく過ぎた。

(九)

御徒目附の岡本五郎右衛門は、明くる日になると心配で堪らなくなつた。

「俺は少くともお年寄の不興を受けてゐる。谷口新平の場合にもさうであつたし、歸城を勧めた場合にもさうであつた。若しさのふの事が表沙汰にでもなつたら、江島はどんなに俺の事を惡しざまに言ふか分らない。若しそんな事にでもなれば、俺の身は忽ち破滅だ。第一、俺は既に俺の名を薩摩の家中に知られてゐる。若し何かの事でこの事が露顯に及んだら、俺が一番に責任を負はなければならぬ。」

五郎右衛門はかう考へると、早速さのふ同列で供をしたお小人目附や供廻りの諸士を集めて寄合評議をした。さのふ供をした者には、始めて件のやうな場合に臨んだ者が多かつた。それ故、いづれも自分の身に難義のかかるのを恐れて、「これはどうしても密々に届けて置いた方が好いといふ決議をした。」

そこで、岡本五郎右衛門はお小人目附などと連名で、お目附支配頭までこの事を届けて出た。お目附支配頭は書面を一通り見ると、「これは容易ならぬ大事になるかも知れぬ」と言つた。

お目附支配頭は更にこの事を御留守居まで届け出た。御留守居へは「江島殿の例になき早さお歸り」について、既に増上寺からの内訴も来てゐたので、割符を合はすやうな女中達の噂に、捨て置いては公儀御條目にも背かうと、お留守居松平主計頭、松前伊豆守、大島肥前守、大久保淡路守、一位様の用人堀丹後守、品川佐渡守、三位様の用人安藤志摩守、阪部飛禪守などが寄り合つて合議をした上、「遂一御吟味然るべし」と老中若年寄まで訴へて出た。

老中秋元但馬守は事月光院のお附人に關する事なので、自分等の一存にもなるまいと、一應侍従の間部詮房まで届け出た。詮房が月光院にこの事を傳へると、月光院は心中大に悲しんだが、先將軍の御臺所天英院への手前もあるので、「嚴重にお取調べ然るべし」といふ返事をした。

御徒目附の告發はやつとこまで來て受理されたのである。

老中若年寄の詮議が一通り濟んだのは二月二日であつた。その日の夕方關係の女中は悉く城を追はれた。末々の女までを合せて上下三百人である。いづれもその跡は關所になつた。

それでも御目見江以上の重い女中には、嘆願によつて町駕籠が許されたが、江島一人にはそれさへ許されなかつた。かの女は桐櫛を剥ぎ取られ、白無垢の小袖一枚に徒跣足で、平河口から兩手を取つて突き出された。飯田町の兄白井方へ親類預けとなるのである。

江島は悲憤に氣も狂ふばかりであつた。かの女は髪を振り亂して、同心二人に手を取られながら、見

物の群集を罵り喚き散らしつつ、足の破れるのも知らぬやうに、薄暗い堀端をあばれて歩いた。兄の家へ到着すると、江島は直ぐに座敷牢に入れられた。

間も無く町奉行の取調べが始まつた。主任は町奉行坪内能登守、お目付衆丸茂五郎兵衛、同じく鈴木理兵衛などである。

木挽町の山村座では、初狂言の『東海道大名會我』の評判が餘り優れないので、二月朔日から狂言をつき直して、『姫鑑薄雪櫻』といふ由井正雪丸橋忠彌の事を「薄雪」の名で仕組んだものを出してゐた。

その丁度七日目の事である。生島新五郎、中村源太郎、太夫元山村長太夫の三人が、芝居から直ぐ奉行所へ引かれた。丁度狂言半ばであつたので、見物へは斷りを言つて、芝居は途中で止めて了つた。同時に中村清五郎、茶屋海老屋も召し出された。そして、御詮議の上、新五郎、源太郎は手錠で座元長太夫へ、清五郎は手錠で大屋五人組へ、長太夫は大屋組へ、海老屋はその町へお預けになつた。

二月十一日には山村座が興行を止めた。丁度その日に、市村座の瀧井半四郎が奉行所へ引かれて、手錠をかけられた。

二月十三日には、江島が兄の家から揚り屋へ移された。交竹院喜内清五郎の對決があり、清五郎新五郎の對決があつた。その結果、新五郎は評定所で縄がかりをして、牢へ入れられた。清五郎の女房も入牢した。後藤の手代清助、次郎兵衛も入牢した。

二月十五日には長太夫、源太郎などが入牢した。

二月十九日には團十郎が召し出されて、御詮議の上、大屋へお預けになつた。團十郎は去年山村座の

霜月顔見世狂言『磊那須兩柱』へ途中まで出たきり、長太夫と公事を仕出して、この頃はもう芝居を休んでゐた。

二月廿二日には團十郎清五郎の對決があつたが、團十郎は又大屋へも預けにあつた。この日、清五郎の女房は責め殺されて命をおとした。

二月廿一日にはお目付衆お係りで、江島の御詮議があつた。森田座の抱へ役者筒井歌之助、中村座の抱へ役者袖岡庄五郎、峯田妻菊、藤田小吉三、市村座の抱へ役者山下刈藻、茶屋橋屋、大黒屋などが呼び出された。そして、御詮議の上、役者は總て座へ、茶屋は町へ預けられた。團十郎も亦召し出されて、再三御詮議の上、終に「申譯相立お構無之」といふ事になつた。長太夫の父友頼も、證人として召喚された。

新五郎は木綿物に手錠で、乞食頭善七のもつかうへ載せられて、毎日本町通を評定所へ通つてゐたが、終に病に冒されて、この日養生の爲出牢を許された。

この日七つ時に、堺町、萱屋町、兩座の芝居が御停止になつた。八ヶ所の宮芝居も興行を禁ぜられた。江戸中の歌舞の巷は悉く暗闇くらやみとなつた。

二月廿四日には、堺町の茶屋八郎兵衛、萱屋町の茶屋大黒屋が呼び出された。

二月廿五日には、喜内清五郎の對決があつた。

二月廿六日には金井六右衛門、金丸四郎兵衛、西興一右衛門、奥山交竹院、同じく喜内などが召し出されて、御詮議の上、口書を取られた。津賀屋善六、出羽屋源七も召喚されて、御詮議の上、お預けに

なつた。

二月廿九日には封印のしてあつた江島の手道具が調べられた。その中には新五郎、半四郎などの艶めいた手帟が澤山あつた。同日、山村長太夫の家宅並に芝居とも關所申し渡された。その時、棧敷からの忍びの道も顯れた。新五郎の宅も關所になつた。津賀屋善六、出羽屋源七の居宅も、檢分の上、關所となつた。

沒收された新五郎の財産の中に、葵御紋附の縮緬小袖と、三位様御手許の御道具とがあつた事が、愈々事件を重大にした。これらはいづれも江島が新五郎へ贈り與へたものであつた。

江島は食事を一飯一合より給與されなかつた上に、夜は眠る事を許されなかつた。覺えずとろ／＼とすれば、引き起されて、白狀を促されるのである。

併し、江島は三日目までは心が確で、一言半句も口を開かなかつた。五日六日となる内に、かの女は身心悉く疲労して、夢うつゝの内に思はず謔言を言つた。「たとへ命は捨てゝも、生島の爲なら惜いとは思はぬ。この事は如何に責められても申すまい」といふやうな意味の事である。番をしてゐた老年の徒目附がこれを披露に及ぶと、「この上は責むるに及ばず、大切な科人なれば、一兩日その儘寝かせ置くべし」といふ命令があつた。

三月四日には、白井平右衛門、豊島平八郎、原田伊右衛門、奥山交竹院、金丸四郎兵衛、西與一右門、津賀屋屋善六、出羽屋源七などが、評定所へ呼ばれて、詮議の上、縄がかり入牢となつた。四座見物、船遊びの事などが悉く明白したのである。

やがて、吉原の茶屋が検分されると、葵御紋附のお長持が発見された。茶屋に聞くと、これは雜司ヶ谷鬼子母神の別當に貰つたものだと言つた。江島が金を借りた僧である。長持の中には芝居役者の衣裳ばかり這入つてゐた。茶屋に聞くと、江島は常に役者を吉原へ連れて來て、芝居狂言をさせたものだと言つた。

雜司ヶ谷の別當は噂を聞いて駈落したが、直ぐ目黒邊で捕へられて了つた。江島と關係のあつた増上寺の徳水院は、終に踪跡を晦まして了つた。

三月五日の朝四つ時に一同へ刑の宣告があつた。江島の受けた宣告書は次の如くである。

一、倭島流罪

お年寄

江

島

江島事段々御取立にて重き御奉公相勤多くの女中の上に立候身分にて内々其行跡正しからず使に出候折節又は宿下りいたし候度々貴賤を選ばずあしき人に近付したるゆかりもなき家に寢泊りいたし候中にも狂言座のものどもと念頃に馴染をかさね其身の行跡正しからず傍輩の女中をすゝめ出し御殿をみだりに相勤め候段其罪重く候といへども御慈悲を以て命をお助け被遊永く遠流に行ふもの也

江島は初め死罪にさまつてゐたのである。ところが、三月三日に諸大名上巳の登城があつたので、その晩方老中達が御機嫌伺ひとして二の丸へ伺候すると、家繼公が御對面になられた。その時幼年の將軍が老中達に向つて、「この程絶えて江島を見ぬが、かれは如何致したのぢや」と仰せられた。老中は直ぐ答へて、「かれは不調法の義ありし故、押し籠め置きました」と言つた。すると將軍が、「大抵の事なら赦して取らせい」と仰せられた。そこで老中が、「上意畏りました」と言つて退いた。これは勿論、月光院

の指喉であつた。江島はかくして死一等を減ぜられたのである。

宮路、木曾路、梅山の三人は奉公縁組お構になつた。吉川、沖津、およの、およし、おげん、おせんなどは、御扶持方召し放され、奉公お構となつた。併し、末々の下女達の關所になつた物品は下げられた。

白井平右衛門は死罪、平田伊右衛門は利島へ流罪、奥山交竹院は御藏島へ流罪、金井六右衛門は八丈島へ流罪、金丸四郎兵衛も同じ島へ流罪、西與一右衛門は改易、奥山喜内は死罪水戸家へお預け、後藤縫殿之助は閉門、豊島平八郎は追放重科、後藤手代清助は新島へ流罪、同じく次郎兵衛は追放、平田養子彦四郎は大島へ流罪、山村長太夫は大島へ流罪、生島新五郎は三宅島へ流罪、中村清五郎は神津島へ流罪、瀧井半四郎は十四ヶ所江戸十里四方追放、津賀屋善六出羽屋源七は三宅島へ流罪を申し渡された。罪人の子供達は、いづれも父と同じ罪名を負うて、親類預けとなつたが、ひとり豊島平八郎の實子足田吉十郎だけは、父へも伯母江島へも度々諫言をせし段奇特とあつて、例式の通りの遠慮で事が濟んだ。奥山喜内はその晩直ぐ、水戸殿集鴨下屋敷で打首になつた。

月光院は江島の遠流を悲しんで、更に一等の減刑を老中に迫つた。間もなく江島は、「其方儀先達永く遠流仰付けられ候處今度月光院様御詔に依て遠流御免被遊内藤駿河守領地へ永くお預け仰付らるゝ者也」といふ申し渡しを受けた。内藤駿河守の領地は雪の深い信州高遠である。

三月十二日の事であつた。老中から突然内藤駿河守へ使があつて、用人一人差し出せと言ふ事である。そこで家臣の城戸十兵衛を遣はすと、「江島事駿河守殿在所へ差遣はさるゝ旨」の達しがあつた。そして

猶「同人事御預けにてはなく遠流同様の儀なれば諸事手軽く手當あるべし」といふ注意があつた。

内藤駿河守が受取つた書附にはかう書いてあつた。

江島事永々遠流たる筈に候間在所高遠へ遣し番人附可被差置候

覺

一、かろき下女一人附置可申候

一、食物の儀一汁一菜に仕朝夕兩度の外無用に候

附湯茶は格別其外酒菓子何れにても給させ申間敷候

一、衣類木綿着物布帷子の外堅く無用に候

翌日、内藤駿河守の家來が揚り屋へ出向いて行くと、囚獄奉行石出帶刀が組同心に下知をして、腰繩の儘江島を引き渡した。その時同心が江島の懷中を改めると、珠數一連、鼻紙一折、守袋の内に法華經一卷、椰子の葉一枚、筭一本、掛香、血脈、厨子入不動の木像一體などがあつた。江島は直ぐと網のかかつた乗物へのせられて、外から錠をゑるされた。

江島は駿河守の屋敷へ着くと、今まで着てゐた黄八丈の小袖を木綿中形の綿入に着換へさせられた。黒緇子の帶は茶帶に代へられた。淺黄縮緬の蒲團も奪はれた。緋紗綾の乗物蒲團も取り上げられた。そして、板圍ひに錠口をつけた長屋へ入れられた。手水鉢の柄杓には柄がなかつた。

この日八つ時に、白井平右衛門が千壽で打首になつた。

三月十五日には山村座が入札に附せられた。寛永十九年五月に山村小兵衛が始めてから七十三年の演

劇史を閲した。江戸四座の一つは、ここに斷滅の運命を見たのである。

三月廿六日には、江島が江戸を發足した。銚をよろされた乗物で、甲州路を信州高遠へ向ふのである。護送の人数は給人一人、醫師一人、足輕五人、下女二人である。

浮世にはまたかへらめやむさしの

月の光のかげもはつかし

これが江島の去る時詠んだ歌であつた。

流罪の船は出發が遅れた。初め三月十八日に出る筈だつたのが、三月廿五日に延び、又それが四月二日に延び、更に又それが四月十二日に延びた。船は深川萬年橋から出るのもあり、靈岸島鐵砲洲から出るのもあつた。見物の群集は岸に溢れた。

奥山交竹院は弟子を一人連れ、衣類一荷、藥種菰包一荷の外に、金三十兩に米二十俵を携へて船に乗つた。平田伊右衛門は金三十兩に米二十俵、津賀屋善六は金三十兩に米十俵、長太夫は金三十兩に米八俵、生島新五郎は同じく金三十兩に米八俵、中村清五郎は金壹兩に米一俵を携へて船に乗つた。

流人の船は品川沖で一晝夜逗留した。賄賂を受けた船役人が、罪人の親戚知己に暇乞を惜しませる爲である。團十郎は新五郎の病みほうけた手を取つて泣いた。友碩は一晩氣違ひのやうに長太夫を抱きしめて放さなかつた。

十二日の晩、金川沖まで來ると、船は又そこで一日一夜逗留した。新五郎は又船の中で病氣になつた。江島は四月朔日に信州高遠へ着いた。そして、領分内の非村へ置かれた。

流罪の船は四月十七日にそれ／＼指定の島へ着いた。

四月十九日から、やつと江戸三座の興行が許された。併し、棧敷に二階三階を置く事はもう許されなかつた。役者の棧敷茶屋などへ挨拶に來る事も禁ぜられた。舞臺の衣裳も絹紬木綿に限られた。狂言も七時半時分には是非しなくてはならなかつた。

寺社地芝居は悉く取り潰された。芝神明の二座、湯島天神の二座、神田明神の二座、市ヶ谷八幡の二座、牛込赤城の一座、淺草の三座、西久保土器町觀音の一座、同町八幡の一座、併せて十三座である。長太夫の父友碩は、日夜山村座の復興を願つて、頻に老體を奔走したが、さうかうする内頼みにする町奉行丹波遠江守にも「お役上がり」になられて了つたので、京橋の湯屋もしまひ、雇人にも悉く暇を出して、一人寂しく麻布の奥へ隠れて了つた。

